

527
34



始



露光量違いの為重複撮影

日本國民史

建國より平安朝へ

小林鶯里著

732
10
10

露光量違いの為重複撮影

日本國民史
建國より平安朝へ

小林篤里著

732
國史
105



日本國民史
第一卷

建國より平安の朝へ

小林篤里著

大正
13. 6. 30
内交

日本國民史刊行の趣旨

歴史は即ち一國の履歷書である。日本歴史は之れ我が帝國
我が國民の履歷書で、苟も我が帝國の國民として、我が國の
歴史に暗いのは、即ち我が自身の履歷を知らぬに等しく、外
國の人々に對しても實に恥かしきことである。殊に我が帝國
には世界に秀絶したる精神がある。我が憲法も此の間に起原
し、我が國民道徳も此の中から胚胎して居るのである。此の
國體、此の精神も亦我が國史を外にして説明は加へられぬ、

三種神器	一
天孫降臨	三
出雲大社	五
海神の宮	七
神武の東征	九
金鷄の靈光	一一
橿原の宮	一三
祭政一致	一四
崇神天皇	一五
四道將軍	一七
狹穗彥の反	一八
伊勢大廟	二二
殉死の禁	二三

日本武尊	二四
燒津の野火	二六
橘姫の貞烈	二八
熊襲野の露	三〇
神功皇后	三三
武内の大	三五
文敎の傳來	三七
皇位の相讓	三八
高津の宮	四〇
眉輪王の變	四三
蚕桑の獎勵	四五
億計と弘計	四六
佛教の渡來	四九

「建國より平安朝へ」内容

本書は天孫降臨に始め、現今聖代までの要項的史實、および、忠臣、義士、孝子、賢婦等、有ゆる方面に亘つて系統的に叙述したのである。即ち建國三千年の歴史を極めて通俗的に筆を進め、巻を重ねて史的趣味を普及せしめんとする主旨より編次刊行を企てたのである。諸君幸に著者の微意に賛同せられ本書の刊行に援助せられんことを冀ふ。

小林 登 里

調伊企灘	五
聖德太子	五
遣唐使	五
蘇我氏滅ぶ	五七
大化の改新	六〇
阿倍比羅夫	六二
中興の英主	六四
大織冠鎌足	六六
壬申の亂	六六
律令の撰修	七一
國史の始め	七三
平城の宮	七五
井手の左大臣	七六
光明皇后	七六
廣嗣の叛	七九

大佛の建立	八一
僧行基	八三
惠美押勝	八五
弓削道鏡	八七
清麿の誠忠	八九
人麿と赤人	九二
仲麿と眞備	九三
渤海國	九七
平安奠都	九六
坂上將軍	九九
淡海三船	一〇一
藥子の變	一〇三
嵯峨天皇	一〇四
高岳親王	一〇七

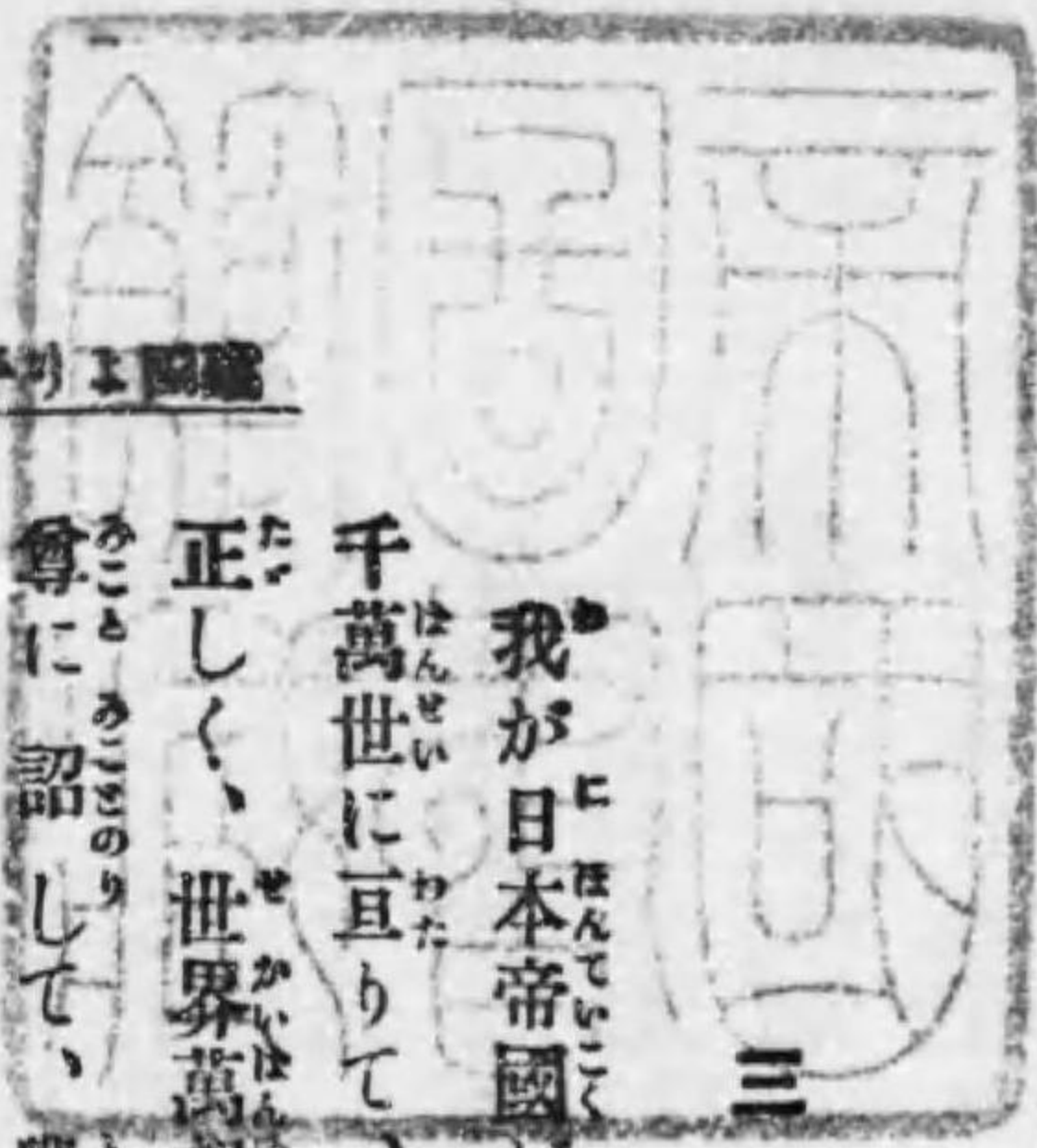
〔第一卷内容了〕

日本國民史

小林 鶯 里 著

〔建國より平安朝へ〕

三種の神器



我が日本帝國が儼然東海の表に屹立し寶祚の隆なること、天地と共に窮りなく
 千萬世に亘りて、皇威の墜ちないのは何故であらふか、とりも直さず國體嚴に民心
 正しく、世界萬邦に冠絶せる所以である。そも我國は皇祖天照大神の、天孫瓊々杵
 尊に詔して、豊葦原の瑞穗國を治めしめ玉ひしより以來、皇統連綿として相繼相
 傳へ、畏くも天日嗣とまします天皇の御位は天地と共に動きなく、千代萬代の末
 までも知らしめさるゝ國であるから、萬の御事、ことごとくに美はしく、殊に歴世受

へ朝安平りよ國體

け傳へ玉ふ、三種の神器は最も貴く、最とも勝れたものであるから、我國民は詳らかに其の根源を知りて、ます〜我皇室の尊き所以を知らねばならぬのである。さて其の神寶の御れる次第を考ふるに、はじめ天照大神が、素盞鳴尊の暴行を咎め給ひて、天石窟に隠れましたるとき、思兼神の智を以て、石凝姥命に仰せられて八咫の鏡を造らしめ、亦玉祖命に仰せられて、八坂瓊曲玉を造らしめ、これを天香久山の真榊の上に掛けたといふことである。また天叢雲の劍は素盞鳴尊が大神の怒に觸れて、天より降り、出雲國の簸の川上に至り給へる時に八岐の大蛇を斬りて、得給へる神劍であつて、これは其の後天照大神に献じ給ひしものである。さて此の三種の神寶を大神は殊の外珍重し玉ふたが、後に天孫瓊々杵尊が、天が下に降臨の際、大神は改めて天孫に授受あらせられた、殊に寶鏡はこれを視ること我を視るが如くせよと仰せられた。それより人皇の世となりても常に殿を向くして、宮中に安置し給ふたが、崇神天皇の御世に至り、神威を濟さんことを恐れて、鏡劍を模造

し大和の笠縫邑に移し奉りて、たゞ八坂瓊曲玉のみを護身の御璽として宮殿に置かせられた。其の後垂仁天皇の御世に、大神宮を伊勢に遷して、これに鏡と劍とを安置した。景行天皇の御世、日本武尊が東夷征伐の際、叢雲の劍を持ちて賊徒を平定せられ、尊の薨後、之れを尾張の熱田神宮に奉祀した。彼の源平の戦に、西海に沈みしは、模造の御劍であつて正體は熱田に奉祀されてあるのである。神器に就てはなほ詳らかに説明せねばならぬのであるが、何れ其の都度述ぶるとして、こゝでは其の成立ちと變遷の概略を擧げて置くのみである。

天 孫 降 臨

天孫瓊々杵尊は天忍穗耳尊の御子にましましてしが、御成長の後、天照大神の勅命により、日本の國へ御降臨といふ事になつた。其の御出立の際に、天照大神は瓊々杵尊を近く膝下に召し寄せられ、勅して宣まふには、瑞穂國は是れ實に吾子孫

が國王として臨むべき良土である、皇孫よ御前が日本に下つたら、よく土地を治めて下さい、さうしたら我皇威は萬世に彌つて、天地と與に窮りなく彌榮えに榮ゆるであらふと仰せられ、大神自ら寶鏡を授け、八坂瓊の曲玉と寶劍とを副へて皇孫に賜はつた、これが即ち三種の神器である、そこで皇孫は天兒屋根尊、大玉命、天鈿女命、石凝姥命其の他の諸神を従へさせられて、いよゝ天上から我日本へ御降臨遊ばした、其の際天忍日命と天津久米命の二神は石鞆を負ひ、頭椎刀を取り、一行の前驅となりて警戒する時に途上に一神あり、其の貌顔赤く鼻高く、眼は鏡の如く輝ける其の有様は少なからず一行を驚ろかした。因て瓊々杵尊は天鈿女命をして問はしめらるゝに、其の神答へて曰く、吾は國つ神猿田彦なり、このたび天神の御子、日本へ御降りあらせらるゝと聞き、奉迎に罷出たのである、私不肖ながら道御案内を致したいから何うぞ其の由を天孫に奏上して下さいと曰す。尊は之れを聞かれて、早速に猿田彦に道案内を命せられ、之れに従ふて日向の高千穂の峰へ御

到着遊ばされた。天孫御降臨遊ばされてより、深く御心を國土經營に注がれ、色々と御苦心遊ばした甲斐ありて、大國主神の如きは進んで國土を献上し奉り、諸神又心を傾けて天孫の御事業を助けられたので、天孫の御計畫は是れより着々と進行した。天孫は其の後、木華開耶姫を納れて皇妃とし、火闌降尊、彦火々出見尊の二神を得させられたのである。我國建國の基は斯くして來つたのであるが、如何にも我等祖先の神々の理想抱負の大なることに實に驚ろくべきではないか、其の精神の高尙なる、規模の雄偉なるは世界の廣き、地球の大なるも到底他に比すべきものはないのである。

出 雲 大 社

出雲大社は大國主神を奉祀せる由緒の古い名高い神社である。抑も大國主神は大己貴命と稱せられ天孫降臨以前、既に少名彥命と共に出雲にありて、國土經營に力

を盡し、異族を従へ國土を開き、其の成績頗る顯著であつたのである、是れ實に國作り大己貴の稱ある所以であるのである。初め天照大神は八百萬の神々を天の安の河原に召されて宣せらるゝには、葦原の中つ國は我御子の治むべき國なれども、今は國土大いに亂れて荒き猛き神々が多いから、何神に命じて平定せしむべきかとの仰せに、神々たちは天穗日命こそ適役であらふと白し上げ、先づ初めに之れを御遣はしになつた。三年も待てども復奏しない。是れではいかぬといふので、此の度は天稚彦を遣はして見たが、是れ亦八年に至るも復還らない。斯くして度々使節を遣はすも、更に又何等の効がない。そこで諸神又議して、今度は強剛の聞えある建御雷及び經津主の二神に命じて、大國主神に強硬の談判を試むべく派遣せられた。二神乃ち出雲の伊那佐の小江に降り、十握の劍を抜いて充分勢を示して、大國主神に最後の談判を試みた。そこで流石の大國主神も止むを得ず、國土一切を擧げて天神に奉ることを快諾したのである。但し之れは大國主神と天孫族と權力争

ひの結果ではない、大國主神も、はじめは拒んで應じなかつたが、大義名分には敵し難く、國土を天神に奉るの正當なるを感せしめたのである。大國主神の行爲は毫も天神の意に違ふことなく、大義に順ふて處決したまふのである。されば大國主神のなされたことはどこまでも男らしく、どこまでも痛快である。因て皇孫瓊々杵尊も大國主神の殊勝なる志を愛でられ、出雲の國に宏莊なる宮殿を營ませられ、天穗日命を之れに添えて賜はる事になつた。此の宮殿こそ所謂杵築の宮殿とて、今は官幣大社に列せられ、萬人の崇敬を受けて居る古い神社である。

海 神 の 宮

瓊々杵尊は木花咲耶姫を納れて皇妃とせられ、火闌降命と彦火々出見命の二神を生み給ふたが、此の二神に就きて小説の様な面白き話がある。其の初め火闌降命は海幸彦と號し、弟の彦火々出見命は山幸彦と號し玉ふた。或る時兄弟試みにそ

の「幸」を換へ、火闌降命は山に入りて獵するも獲物なく、直ちに弓矢を還された。然るに弟の彦火々出見尊は、過て釣鉤を失ひ、新に鉤を作りて償ひ還し玉ふたけれど、兄は原の鉤を責めて中々承知しない。彦火々出見尊は大いに嘆き海岸をさまよひて鉤を得んと苦心せられたけれども、どうしても見付からぬので、弟尊は百計盡きて思案に沈んで居る折りしも、不圖鹽土翁に遇ひ、告ぐるに事情を以てした。翁大いに同情して、爲めに目無し籠を作り、尊を之に乗せて海神の國に到着せしめられた。然るに海神の宮は、それはく美しい御宮で、數重の樓閣巍然として居る。時に海神の女豊玉姫、尊の居ますを見て、急ぎ海神に告ぐ、海神曰く「之れ天津日高（天皇）の御子空津日高（太子）なり」と即ち尊を呼び入れ、厚く之れを待遇した。そこで尊は具に委細を話されたから、海神即ち大小の魚族を召集して審問した、遂に一匹の鯛の口より尊の失ひ給ひし鉤を得て、尊に献り、且つ海神の女豊玉姫を尊の妃とし、尊は居ること三年にして遂に歸郷し給ひ、即ち原の鉤を

兄火闌降命に還されたから、兄の命も遂に彦火々出見尊に屈服し、彦火々出見尊遂に皇位を繼ぎ玉ふたとの事である。小説のやうな取るに足らない話の様ではあるけれども、此の話の中には何か一種の味ふべき喩を含んで居る。

神武の東征

彦火々出見尊の後、鷓鴣草葺不合尊、玉依姫を妃として、五瀬命、稻氷命、御毛沼命、若御毛沼命即ち神倭磐余彦尊を生み玉ひ、皇業恢弘の緒こゝに開くに至つた。神倭磐余彦尊は即ち神武天皇である。尊年十五にして立つて太子となりたまひ、天資英邁にして勇武に秀で玉ふた。鹽土の翁は當時の大智者であつて、天皇に説くに東征の事を以てし、且つ詳らかに日本國の地理を説明したから、天皇の意即ち動き、茲に志を決して、諸兄及び諸皇子等と議し、西方は既に治まつたけれど遠遠の地猶ほ未だ豪族割據して、王澤に霑はない。且つ聞く東に美地ありと、依つて

此の地に至り天業恢弘の基を開き、以て天下に君臨せんと、諸皇子皆之れに賛成し玉ふたから、冬十月天皇親ら軍船を醸し、多くの軍隊を率ゐて、日向國を進發せられ、東國へと向はれたのである。其の豊後の速吸之門に至りまし、時、國神珍彦なるもの、天皇の軍を奉迎し且つ其の嚮導たらんことを請ふた。天皇之れを聽し玉ひ、即ち水先案内者として、一行之れに従ひ、豊前の宇佐を経て筑紫の岡田の宮に滞り玉ふこと一年、更らに安藝の多計理宮に七年在しまし、次で吉備の高島に八年御滞留の後、大いに舟楫を備へ兵食を蓄へ充分の戦闘準備をなし玉ひ、軍容を盛んにし、威風堂々と舳艫相啣みて、攝津の浪速へと御渡りになつたのである。けれども當時大和紀伊の地方には多くの民族住居し、天皇の軍に反抗する者多く、紀伊の名草戸畔丹敷戸畔、大和の八十梟師、長髓彦、土蜘蛛等の賊あつて、各々險要の地に割據して居つたから、皇軍の精銳を以てしても之れを征定するには、中々容易の業ではなかつたのである。

金 鷄 の 靈 光

神武天皇は浪速に御上陸後、流を溯りて河内の蓼津に上陸し、龍田に赴かんとしたまふたけれども、道路險惡の爲めに軍を還して、東の方膽駒山を越えて大和に入らんとし玉ふた。時に賊魁長髓彦は早くも大軍を以て、皇軍を孔舍衛坂に遮り戦ふた。賊は巧みに地利に據りて防ぎ戦ふたから、皇軍はどうしても進むことが出来なないで、皇兄五瀬の命は却つて賊の流矢に中つて薨せられ、皇軍は少なからず利を失ふた。そこで天皇は痛く之れを慨きて、宣せらるゝには、吾は日神の御子でありながら、日に向つて戦ふは宜しくない、今より日を背負ひて賊を撃たうと。一先づ軍を草香の津に退け、血沼の海を経て、紀の國の男の水門に向はれ、茲に軍容を新にして名草へと進まれ、一撃名草の戸畔を誅し給ひ、是れより猶進んで熊野の一戦に丹敷戸畔を滅ぼして更らに八咫鳥（建津々身命）を嚮導として大和の吉野に至り

てからは、皇軍の向ふ所、諸賊風靡、連戦連勝の勢であつた。然し残念な事には、唯一の長髓彦を滅ぼすことは出来ないのである。けれども皇軍一致決死の勢で進んで居ると、不思議にも何所からともなく、金色まばゆき一羽の鴉が、天皇の御弓先にとまつた。此の奇異の現象に諸軍みな驚ろき眺めて居る。其の光の赫々たる電光の様であつたから、さしも強き長髓彦の軍も、其の光に射られて戦ふことが出来ない。そこで此の奇瑞に撃たれたる、長髓彦はこれでは逆も皇軍に抗することは出来ないと思つたから、使を遣はして天皇に申し上ぐるやう、私は先に天神の御子の饒速日命が、天の磐船に乗つて、天より降りました時、吾が妹を命の御妃に差上げました、そこで私は饒速日命を眞の天神の御子だと思つて居るのに、今亦あなたが、天神の御子だと偽はつて、私を攻め滅ぼさんとせらるゝは間違であらう、と云つて饒速日命の持つて居られた、天の羽々矢一隻と歩鞠を天皇に示された。天皇は之れを御覽になり、夫ならば此方にも有るぞよと仰せられて、同じ寶物の二種を御

示しになつたので、長髓彦も少なからず驚ろいたが、猶ほもこりすまに抵抗して中々服従しない。所が一方饒速日命の子可美真手の命は、天神の御子には敵し難いと覺り、自ら長髓彦を殺し、其の衆を率ゐて歸順した、天皇其の忠誠を嘉し命に神劍を賜はり深く之れを御用ひになつた。

檀原の宮

(紀元元年)

神武天皇東征六年の後、今は中國至強の長髓彦も誅せられ、其の他の賊徒も平らぎ、大和の附近は風を迎へて靡く様になつたから、茲に良地を覺めて大和の畝傍山の東南檀原に帝宅を營み、即位の式を擧げさせられた。之れ實に天皇が、天業を恢弘し天下に光宅すと宣ひし土地であつて、こゝに「六合を兼ねて都を開き、八紘を掩ひて宇と爲さん」との大抱負を示し玉はんとするのである。其の御儀式は道臣命と大久米命とが、大伴と久米の二隊を率ゐて宮門を守り、饒速日命は内物部、

天富命は齋部を率ひ、三種の神器を正殿に安置し、充分皇の天御威徳を御示しに
なり、稱美して「畝傍の檀原に底つ岩根に宮柱太しき立て、高天原に搏風高知りて、
始馭天下天皇」と云ひ人民帝を尊んで、神日本磐余火々出見天皇と申し上げたの
である。此歳を元年として日本の紀元とする、然し之を今の太陽曆に直すと、丁度
二月十一日に當るから、明治五年此の日を紀元節と定められた。實に此の日は日本
國民に取りては、最も大切の日であるから、誠心誠意、之れを祝し奉らねばなら
ぬ。

祭 政 一 致

(紀元四年)

神武天皇の御世は猶祭政一致の治であつた、未だ此の際には帝と神との別明か
なく、帝は即ち神であらせられたのである。故に神武天皇御即位の節にも三種の神
器を正殿に安置し、所謂殿を同じくし、牀を共にせられたのである。即位の四年天

皇の詔にも「我皇祖の靈天より降臨して朕が躬を光し助く、今諸賊已に平ぎ海内
無事、以て天の神を祭りて大を申ぶ」と宣はせられ、靈時を鳥見の山に立てし
め玉ふた、即ちその靈時は皇祖天神を祭り玉ふたに外ならないのである。抑も「政」
は「まつりごと」の意味であつて天皇が神意を受けて政を行ひ天下に君臨し玉ふ
たのであるから、謂はゞ神を祭る事と、政治を行ふことと同一であつたのである。
そこで天皇の御世には天種子命、天富命が専ら天皇を輔佐し奉り宮殿の中に
侍して朝政を執られた。即ち此の二命は當時に於ける左右大臣であつたのである。
斯くして天皇は天の下安らけく平らけく知ろしめされ、天業恢弘の精神を實行せら
れたのである。

崇 神 天 皇

(紀元五六四年)

神武天皇崩御の後、第十代崇神天皇に至る大約五百年の間は、王化四方に厚く皇

威天下に布き、別に歴史上大なる事變はなく、太平無事の御世であつた。然るに崇神天皇に至り、雄略にして敬神の念に厚く、即位の三年、都を磯城に遷し、稱して端籬の宮と名づけ、皇威益々伸張したのである。天皇深く神祇を敬し、即位の四年詔を發し、皇祖の神意を繼承して、黎民を安せんことを誓ひ玉ふた。それから神器は、天孫降臨以來代々の天皇は、常に殿を同じくし牀を共にして、須臾も離し玉はなかつたが、崇神天皇はかねて敬神の志厚くあらせらるゝ所より尊い神寶をいつまでも御殿の内に奉祀して置くのは、如何にも恐れ多きことと思召し、神鏡及び天叢雲の劍をば大和の笠縫の邑に、神籬を立て遷し奉り、皇女豊鍬入姫に其の祭を仰せ付けられた。倭大國神をば停名城入姫をして祭らしめられた。そこで天皇は忌部氏に詔し、新に神鏡神劍を摸造せられ、八坂瓊の曲玉と共に殿内に安置し奉り、護身の御璽となされたから、こゝで始めて神宮と皇宮との別が定まつたのである。天皇亦大和の大物主の神を御諸山に祭り、又別に八十萬神を祭り、天

社、國社の制を定め玉ふた。次で風の神を龍田に祀りて五穀の豊熟を祈り、香取の神にも奉幣して王化の普及を祈り玉ふたから、御即位の初年に流行した疫病も、初めて止み、國家は静謐に、五穀は豊熟し、百姓も饒かになつたといふことである。實に崇神の御政治は敬神の御心よりして、廢れたるを興し絶えたるを繼ぎ給へる中興の御政治とも稱すべく、時人敬つて、御肇國天皇と申し上げたのは、誠に偶然ではないのである。

四 道 將 軍

(紀元五六四年)

崇神天皇は斯か英明の君であらせられたから、皇威を全國に及ぼさうとの思召から、四道將軍派遣の詔を下され、進みて建國の精神を擴張せんことを企て玉ふた。抑も神武天皇の御時、西南はもとより南方地方までも大方は服従したるが、其の後長き年月を経たる事として、各地方に人民が侵略を逞しくし、それが爲めに再

び亂る、事が有てはならぬと思召し、此の快舉を試み玉ふたのである。當時の詔に今は神祇を敬つて、災も息みたれど、遠地の人民は猶王化に霑はない、因つて將軍を四方に遣はして、朕が志を知らしめよと仰せられ、即ち大彥の命を北陸に、武停川別を東海に、吉備津彥を西海に丹波道主命を丹波に遣はされ、其教を受けざる者あらば、兵力を用ふべしと仰せられた。此の四道將軍は何れも皇族であらせられ、當時の勢力家であつたのである。されば大彥の命は天皇の庶兄武埴安彥の亂を平定し、吉備津彥と武停川別は出雲振根といふ賊を殺して、各々偉功を樹て勇名を轟かし、即位の十一年夏四月には、何れも戎夷を平げて凱旋したから、是より皇威は海の内外に洽ねく、國內安寧、天下無事となつたのである。

狹穗彥の反

(紀元六三五年)

第十一代垂仁天皇は又た英明の君主であつた。崇神の御世に庶兄武埴安彥の反が

あつた如く、此の天皇の御世にも亦皇后狹穗姫の兄、狹穗彥の亂があつた。別に大した亂ではないが、亂の顛末が如何にも悲惨で、美しい悲しい、同情すべき點が多から、茲に擧げて見たのである抑も天皇の皇后は、開化天皇の孫で狹穗姫と云ひ才色雙美の佳人であつた、帝の妃となり、譽津別命を生み給ふたが茲に皇后の兄に狹穗彥といふ者がある。反を謀り皇后に説て曰ふには、容色を以て人に事へる者は若し色衰えたる時には必ず寵愛が失せる、だからいつその事に自分が天子となりてそなたと一所に天下に君臨しやうではないかと、途方もない事を皇后に勧め、且つ短劍を與へて天皇を殺さしめやうと謀つた。一日天皇が皇后の御許に御幸せられ、皇后の膝を枕に一睡を催された。皇后は兄より頼まれた一大事は此の時だと思ひて短劍を中てようとしたが、良心に責められて手先か緩んで、どうしても刺せない、たゞさめくくと泣くのみであつた。ところが其の涙が帝の龍顔を濕した、そこで天皇は睡より起きて、皇后に宣ふには、朕は今不思議なる夢を見た、錦の色をした小

さい蛇が来て、朕が頸をグル／＼と巻いたところへ、俄かに大きな雨が狭穂山（大和佐保山）より落ちて来て、朕が面を濕すと夢みた、これは何した夢だらうと仰せられたので、皇后は逆も兄の罪を匿すことは出来ないと思召し、地に伏して兄の反意あることを奏し、妾は兄の命に背くことも出来ず、さればとて、天皇の御恩には猶更背けません、然し申し上げれば兄はなくなるし、申さねば國家が傾く様なことになり、何にとも申譯けがなくて泣きました。その錦色の蛇は短剣で、大雨の降つたのは、妾の涙でございませうと、隠さず申し上げたところが、帝は仰せらるゝに、是れ決して皇后の罪ではないとて、即ち將軍八綱田に命じ、狭穂彦を討たしめた。狭穂彦は稻を積みて城を作り皇軍を防いだ、そこで皇后は大いに悲みて、たとひ自分は皇后であるけれど、今兄を失なつたら、どんな顔をして、天下の人に見ゆることが出来ようとして、即ち皇子を抱きて兄の城に入り給ふた。帝は更に人數を増して城を圍み火を放ち急に皇后と皇子を出さしめた。けれどもどうしても従は

ない、ただ皇子のみを御手渡して仰せらるゝに、妾が城に這入つたのは兄の罪を免し玉はんことを願つたのである、然るに御免がないところから見れば、妾同様罪があるのでございませう、妾は自害をして相果てますから、後々の事は、丹波道主王の女が五人ありまして何づれもそろつて美しく、操正しき者でありますから、どうぞそれをば御寵愛下さいましと云ひ、帝に御別れを告げて、自分は兄と共に城中に自殺した。誠に皇后の身にとつてはこれほど悲いことはなかつたであらう、天皇と兄との間に處して身の置き所なく皇子に因つて兄の罪の免を願つてみたれども御免がないので、ただ此の上は死するより外に道はないのである、さうして死するに臨みて、心静に後宮の事を奏して相果てたる其の心情、實に美しく、誠に氣高いではないか。

伊勢大廟は申すまでもなく、日本の最も大切なる神宮である。さきに崇神天皇は鏡と劔とを大和の笠縫邑に御移しになつたが、垂仁天皇亦敬神の念に厚く崇神の志を継ぎ、勅して宣まふには、我が皇祖神祇を禮祭し、躬を勤めて怠ることなかつた。今朕が世も同じく神祇を敬ひて、祭祀を重んずるであらふと仰せられ、先づ天照大神を豊鍬入姫命より離ちまつりて、倭姫命に託し給ふた。そこで倭姫命は大神鎮座の地を求めんとして、大和より近江に入り、東の方美濃を廻りて、伊勢國に至り玉ふた。時に天照大神の神勅に、神風の伊勢の國は常世の浪の重浪寄する國である。我是の國に居らんと欲す、との御託宣があつたから、即ちこゝに社を建て、鏡と劔とを祭り永久鎮座の地と定めて、當時之れを磯の宮と稱へた、是れぞ即ち内宮である、其後景行天皇の御世に、日本武尊の東夷御征伐の折り、倭姫命は是れに劔を授けられた。然るに日本武尊は劔を尾張の熱田に残して薨せられたから、自然劔は熱田に祀られ、伊勢には只鏡のみを奉祀することとなつたのである。

其後雄略天皇の御時、丹波豊受の大神を伊勢の渡會に遷され稱して外宮と云ふ、即ち大神宮とは内外宮の併稱であつて、伊勢大廟とは申すまでもなく、此の兩宮の事である。斯くして千代萬代と我日本國のあらん限りは五十鈴川の流れ清きあたり嚴然と鎮座ましまし、永く我日本を守護し給ふのである。されば我國民たるものは日夜に惶み敬ひ、皇祖の御威徳を仰ぎ奉ると共に、動きなき我大御世の千代に八千代に榮え給はんことを祈らねばならぬのである。

殉 死 の 禁

(紀元六五九年)

太古には妙な習慣があつて、位の高い人が死ぬと其の重なる臣は生きながら死者の墓側に埋めらるゝと云ふ、聞くに身ぶるひのする恐ろしき悪弊があつたものである。垂仁天皇の同母弟倭彦命が薨せられた時も、先例に従つて、厩近の臣下は同様生埋めにせられた。ところが數日も死せず、晝夜泣き叫んだから、天皇大い

に之れを悼ませられ、勅して殉死を止めしめ給ふた。後に皇后日葉酢姫薨去の時、野見宿禰の奏請によりて、出雲國から土部一百人を召され、埴を以て人馬其の他種々の形を造り、之れを陵墓に樹つる事となつた、之れを名づけて埴輪また立物と稱するのである。此の土偶は人をも傷めず、至極時宜に適した物だからといふので今後墓側には、必ず之れを用ふることとなつた。そもこの土偶を工夫した野見宿禰は出雲の國の人で力の強い勇士である。嘗て高麻蹶速と云へる者を蹴殺した事がある。此の埴輪を作つた功を賞して土部臣の姓を賜ひて、子孫代々大葬の事を掌る様になつた、彼の有名なる菅原の道真は、即ち野見宿禰の後裔である。

日本武尊

(紀元七五八年)

日本武尊は景行天皇の第二子であらせられた、容貌美しく力飽くまで強く、而も身の長一丈に餘り、雄略の氣象に富んだ雄々しき皇子であつた。景行天皇の御世

には熊襲が度々反いて少なからず良民を苦しめた。即位の十二年、天皇親征して之れを討せられたが、夫れより八年を経て、熊襲亦王命に抗して邊境を荒したから、今度は皇子小碓に命じて、之れを討たしめ給ふたのである。皇子時に御年十六、美濃の國人弟彥、石占横立及び尾張田子の稻置、乳近の稻置等を率ゐて出發せられ、其の年の十二月熊襲の國に着せられ、先づ地形の難易を探り、之れを討取らんと手段をめぐらされた。當時熊襲の巨魁、取石鹿文と云ひ、又川上梟師ともいふ。一夜親族を集めて酒宴を催したので、皇子は天の輿へと喜び、梟師の色好みなるを利用して、髪を解き少女の姿に装ひ、劔を袖の裏に隠し、女人の中に混じて城中に忍び入つた。梟師は皇子の艶やかなる姿を愛で、手を取りて其の席に延き、酒を進めて益々興に入り其の身に危害の及ぶも知らず笑ひ楽しんで居た。其のうち夜は漸く闇に、衆既に散じ左右人なきに至る。時こそよければ、皇子は隠し持つたる劔を執り、柄も徹れと梟師の胸を刺し給ふた。梟師大いに驚ろきて叫ぶ、暫し待ち

給へ申さんことありと。皇子即ち手を止めて待ち給へるに、梟師先づ問ふ、君は何人に渡らせらるゝか。皇子對へて、我れこそは大足彦天皇の子日本童男と云ふものなり。梟師之れを聞き叩頭して曰ふ、さてもく強き皇子にこそおはす、我れは國中の最も強力の者なるに、逆も君には敵し難し願はくば尊號を奉らん、あはれ聽し給ふべし。皇子宣まはく、聽す。申せ。梟師乃ち申す、今より後日本武尊と稱し給ふべしと、梟師は斯く言ひ畢りて息絶えたから、皇子は返す刀に弟梟師を唯一刀の下に誅し、諸將をして餘類を亡さしめた。さしも邊境に威を振ひし、巨魁梟師も誅に伏し、尊は凱旋して、二十八年春二月京に還り、能襲平定の狀を復奏せられたのである。

燒津の野火

(紀元七七〇年)

日本武尊は熊襲を平定して歸京せられたが、景行天皇の四十年東夷が叛いて邊

境を荒した。時に天皇は群臣を召して誰れを征伐に差向けたらよからふと議せられたところが日本武尊奏せらるゝには、臣は先きに熊襲を征したから、今度兄さんの大碓皇子を御遣はし下されと勸め給ふた。之れを聞いて大碓皇子は愕きて逃げ走つたので、尊は奮然として熊襲平定してまた幾年も立たないのに、今又東夷が叛くのは誠に慨かましいことである、早く根を絶たなければ、どうして泰平の御世になれやう、臣を御遣しになつたら、きつと平定致すべしと奏せられたので。天皇は此の勇々しき詞を聞き大いに喜びて宣ふには、汝は力も強く體も大きい、攻むれば勝ち、勝てば取るまことに頼母しい皇子である、願はくば恩威を以て敵に對し、武を振ひて賊を討てよとてひゝらきの八尋矛を尊に授けられた。そこで尊は勅命を拜して御妃の弟橘姫を連れて出征せられ、吉備の武彦大伴の武日に従へ、四十年冬十月發程せられ、先づ伊勢に到り、大神宮を拜し別を倭姫命に告げ給ふた。倭姫命、天叢雲の劍を尊に賜ひ、又囊を賜ふて大事の場合には此の囊を解かれる事を忘れ

玉ふなと怒ろに戒しめられた。尊は此の二品を押戴き、駿河の國へと向はれた。ところが其の地の國造が、甘く尊を欺きて、獵を勤め、火を放ちて野を焼いたから尊は其の欺かれたるのを知り、囊より燈を出して火を打ち、向火を付けて賊を焼き亡ぼし、又細劍を以て草を薙ぎ、漸く身を免れ給ふた。是れより此の劍を草薙の劍と謂ふ、其の地を燒津と稱へる、今現に東海道の一驛に當り、猶燒津と稱へられて居る。

橘姫の貞烈

(紀元七七二年)

日本武尊の東夷征伐に付き、茲に一場の悲惨なる物語りがある。そは何であるか、外でもない妃弟橘姫の入水の一途である。尊は燒津にて賊難を免れ、却つて向火を以て賊を亡し、是れより進んで相模より船にて上總に往かれんとし、給ふたところが、海上俄に暴風起り、船は大浪に揺られて流れ漂ひ、どうしても進むことが出

來ない。流石剛勇の尊も人力の如何ともせん方なく、唯心に大神の冥助を祈り給ふのである。時に尊の妃弟橘姫の申さるゝやう、此の様に浪の荒れまするのは、必ず海神の御崇りなさるのでございませう、それで妾は尊に代りて海に身を沈め、海神の御怒を和らげ、尊を恙なく御渡海遊ばすやうに致しませう、どうぞ尊には征伐の大命を遂げて、御復命なされませと、言ひ終りて身を躍らし逆巻く荒浪の真中へ投せられたので、それから不思議にも、風和ぎ波静まりて船は恙なく進むことを待たのである。あゝ何ぞ悲惨なる、何ぞ壯烈なる、されど尊は天皇の大命を帯び給へる。貴い御身である。無難に渡海ましませねば、征討の功は成らないのである。橘姫の熱情尊の思ふの餘り海神の犠牲となり給へる、其の恩愛、貞烈とも、悲惨とも、まことに例へがたく、美しく、氣高いではないか、げにや橘姫の如きは、日本婦人の龜鑑とも稱すべきであらう。姫の入水せられたる海を走水といひ、今の浦賀海狹に當るといふことである。あゝさても姫の壯烈なる最期を、涙ながらに見送りた

る、尊の心中はどんなであつたらう、想像し參らするも唯涙の外はない。さうして
姫が最愛の尊に永別を告げ給ふの一刹那、去るに忍びずして詠まれたる、一首の歌
こそいと悲しい。

さねさし相摸の小野に燃ゆる火の、火中に立ちて問ひし君はも

其の後橘姫の御櫛が海岸に漂着したので、それを記念として御墓を立てられた、
相摸國梅澤のほとり、吾妻の森といふのが其の地であるといふ事である。

能 衰 野 の 露

(紀元七七三年)

日本武尊は上總より海路を取り、大鏡を船に懸け、蝦夷の境へと進まれたので
夷どもは大いに畏れ、抵抗は出来ないと覺り、拜していふ、君は神様であらせらる
るか、どうか御名まへを知らして戴きたい。尊宣まふ、吾は現人神の子であると、
夷どもは一向悦服し、忽ちに降り乞ふた。蝦夷既に平いだので、日本武尊は、

日高見國より遷つて、新治、筑波を過ぎ、甲斐に至り、酒折の宮にましまし、歌を
以て侍者に問ひ給ふ、

にひばりつくばをすぎて、いくよかねつる

侍者答へて曰ふ、

かゝなへてよにはこゝのか、ひにはとをかを

世に之れを連歌の始と稱へる。然るに此の時は、越の國や信濃國は未だ王化に霑は
ないから、そこで大伴武日をして、越の國の地理人情を視察せしめ、尊は夫れより
信濃の國に入り給ふた。夫れより尊は進んで美濃の國に入り、大伴武日と會し、尾
張にて宮簀姫を娶り、別に臨みて劍を止めて仰せらるゝには自分が都に歸つたら、
間もなく其方を迎へ取るから之れを其の時の証據にせよと。時に近江國膽吹山に荒
ぶる神ありと聞き、尾張を發し山中にて病を得て、伊勢の能衰野に薨せられた、時
に御年僅に三十。あゝ尊は其の總角にも及ばざる御時、遠き西にて熊襲を征し、再

び東夷を征して、年尙壯にして薨じ給ふ。其の勇、其の略、たしかに古代史中隨一人傑である。天皇大いに哀悼し日夜悲叫して止まず、群臣を遣はして、能褒野の陵に葬り給ふた。時に一羽の白鳥、陵より出で、大和の翠彈原に至り、更に飛びて、河内の古市に止まつたから、つまり三ヶ所に、陵を立て、之れを白鳥の陵と稱する。然るに熱田に止まつた宮簀姫は尊の消息を待ち焦れ給ふたが、何の御沙汰もない所から、親族の人々に相談をして其の地に社を建て、寶劍を祀られ、永く之れに奉仕せられた。これぞ今の熱田神宮で、官幣大社に列せられ、大樹森々晝猶ほ暗く、まことに神さびたる境内である。

神 功 皇 后

(紀元八〇六年——八六〇年)

第十四代仲哀天皇は日本武尊の御子である。即位の二年、氣長足姫命を立て、皇后とせられた。皇后は開化天皇五世の孫、容貌美にして聰明敏智、氣象極め

て雄々しき方であつた。天皇立后の後程なく皇后と共に越前の角鹿(敦賀)に幸し氣比の行宮にましました。天皇は南方を巡幸せんとて、紀伊の國に赴かれ、熊襲の動搖するを聞き玉ひて、天皇は先づ之れを討たんが爲めに、紀伊の國より直ちに海路をとりて穴門(長門)に幸し給ひ皇后を角鹿より召され、穴門の豊浦の宮にましますこと五年餘、後此の地を發して筑紫に向はれ、橿日の宮にて軍議を凝らせられたが。此の時皇后は神教を蒙り熊襲は恐るゝに足らない、先づ新羅を御伐ちなさいませと、天皇に奏したけれども御聽しがない、強ひて熊襲を討たんとし給ふたが、其の功なく遂に陣中に崩せられた。そこで皇后は天皇の神教に従はずして早く崩じ給ふたのは、神の祟りであるとして、齋宮を作り武内宿彌、中臣烏賊津に神を祭らしめ、諸國より船舶を集めて自ら橿日の浦に至りて髪を解き、結びて男装をなし、兵馬を練り、舟師を率ゐて順風に乗じて直ちに新羅に向はれた。時に皇后は御身重く、出發の際は丁度臨月であらせられたのである。而も毫も意に介し給はず、石を取つ

て腰にはさみ、事意を得て歸つた日に産ましめ給へと祈りて征伐に赴かれた、其の壯烈、實に鬼神を泣かしむる。新羅王波沙寐錦は、大兵の來たのに驚ろき畏れて、魂身に添はず、吾聞く東に神國ありと、必ず其の國の神兵であらう、どうして克つことが出来やうかと、自ら王船の前に至り、叩頭していふ。今より以後は長へに奴隸となり毎年貢を奉りませうとて、重臣の微叱己知波珍干岐を人質として皇后に獻じた。そこで新羅は刃に刃らずに降服したから、皇后は大矢田宿禰を彼の地に止めて鎮守せしめ、威風堂々と凱旋せられた。かくして三韓を我屬領となし、筑紫に至りて目出度皇子を産み給ふたのである。之れを應神天皇と申し上げる。皇子御誕生の後、自ら政を執り給ひて、御齡百歳を以て稚櫻宮に崩せられた。實に皇后の如きは千古其の比を見ざる稀生の女丈夫にて、出でゝは新羅を征し、入つては國政を攝し、群臣懼服し海外慣伏す、まことに我國の女傑として誇り得べきである。

武 内 の 大 臣

武内宿禰は、景行、成務、仲哀、應神、仁徳の五朝に歴仕して、忠勤を盡したる國家棟梁の臣である。景行天皇の朝には熊襲征伐の計畫に參與し、又大命を奉じて東北諸國の民情形勢を視察し、歸り奏して云ふ。東夷に日高見の國といふのがございしますが、男女共に文身をして、甚だ慥悍である。これを蝦夷と稱へて居りますが、土地も廣く、肥えて居りますから御征伐をなされたら宜しうございませうと其奏上の結果は、即ち日本武尊の東夷征伐となつたのである。成務天皇が立たれてから良く之れを輔佐し奉り、大臣に任せられた、是れを即ち大臣の始めである。後ち仲哀天皇が、神勅に従がひ給はずして、熊襲を討じて其功なく陣中に崩じ給ふた時に、宿禰は神功皇后と謀りて、三韓征伐の計畫に參じ、皇后を輔けて之れを征し、凱旋して筑紫に歸るや、皇后の生み玉へる皇子を、襁褓の中より御育て申し上げ、

始終皇后と進退を共にしたのである。時に仲哀天皇の庶王子香坂忍熊の二王子が、兵を擧げて皇后に叛いたから宿禰は皇后の台命を奉じ、忍熊王を誅して、其の亂を平げた。應神天皇御即位の後ち、勅を奉じて筑紫を視察し其の他外政を鞏固にして民利を興して至大の功勞を樹てた。斯く赫々たる勳功があつたから、やがて他の嫉みを受け、宿禰の弟甘美内宿禰は、兄武内は三韓と通じて不軌の志しがあると、天皇に奏し上げた。天皇は之を信せられ、使を遣はして之れを殺さしめようとせられたが、武内の臣眞根子といへるもの、武内の身代りとなり、自殺して相果てたから、武内は一命を遁れ、急ぎ宮中に至り、反意のないことを奏した。そこで天皇は念の爲めに、武内兄弟に探湯を行はしめ、其の眞偽を試みたに、弟の讒言であることが分つたから、武内は何の御咎めもなくして再び重く用ひられ。仁徳天皇の朝に至りても、またならびなき寵愛と信任とを受けた。かくして武内は非常の長壽を享けて、仁徳天皇の五十五年病を以て薨じた、二百餘歳の高齡に達したといふことで

あるが、はつきりとは分らない。何しろ武内の如きは、誠に皇室に忠なるものであつて、其の勳其の功、五朝に亘りて其比なく、實に國家の棟梁ともいふべきものである。それで其の後裔たる蘇我氏が、後世權勢を專にし、一時朝廷をも凌いだのは要するに之は父祖の餘勳に外ならぬのである。

文教の傳來

(紀元四四五年)

我國は大古から、支那や朝鮮との交通もあつた様であるから、支那の文字も早くから傳はつたであらふけれども、年代が古いからはつきりとは分らないが、其の事の歴史上に見えたのは、應神天皇の朝よりである。應神天皇の十五年、百濟王より阿直岐といふ者を遣はし、二匹の良馬を朝廷に獻じたことがある。ところが此の阿直岐は中々の學者である。そこで天皇は太子の菟道稚郎子をして阿直岐に就き、經典を學ばしめ給ふた。時に天皇阿直岐に仰せらるるには、其方の國には、まだ立

派な學者があるかと。阿直岐對へていふ、王仁と云ふ大學者がございますと。天皇はそこで使を百濟に遣はして、王仁を御召しになつた。王仁は日本よりの聘に應じて其の翌年渡來し、論語十卷千字文一卷を獻じた。太子は之れより専ら王仁を師として、經典を學ばれ、頗ぶる御上達になり、天皇の二十八年高麗から朝廷に上れる表文に、高麗王敎日本國との文字があつたのを、太子は之れを見て、大いに怒り其の無禮を詰責せられた程である。また阿直岐や王仁の子孫は永く日本に残り、兩者とも文敎の爲めに盡したといふことである。

皇位の相讓

(紀元九七二年)

應神天皇は、かく稚郎子皇子の賢く、利發であるのを殊の外寵愛せられて、我が後には必ず此の皇子にと御思召され、兄の大鷦鷯皇子を超えて、之れを太子と定められた。これ後に紛擾を生ずるの基となつたのである。大鷦鷯皇子は兄である上に、皇

後の御腹であるから、順序から云へば、當然太子となるべき筈であるけれども。大鷦鷯皇子には、天皇の稚郎子を愛し玉ふを知りて、天皇の意を迎へて、稚郎子を太子に勸めた。そこで天皇はそれに決して、大鷦鷯皇子をして太子の輔佐役たらしめたのである。さて天皇御在世中には何事もなかつたが、天皇の崩後太子は、大鷦鷯皇子の年上で、賢くあらせらるゝのを見て、仰せらるゝには、兄が上にありて弟が下に在るのは、古今の常理である。殊に兄上は御聰明で、天晴天子の器であらせらるゝ、それで願はくば兄上が天子とならせられ、私は臣となりて、御輔け申しませうとて、皇位を兄皇子に讓られた。大鷦鷯皇子宣まはく、先帝が殊の外其方を愛し給ふたのであるから、宜しく皇位に御即きなされよとてこれ亦固く辭退せられて、はてしがない。然るに御異腹の兄弟である、大山守皇子といふのが、自分の御同腹の大中彦皇子が皇位を得ざるを恨みて、太子を殺さんと謀つた。そこで稚郎子は兵を苑道に待伏せて、大山守皇子を殺し、太子は宮を苑道に造りて、隱遁し、ひたす

る大鷦鷯皇子の位に即き給ふことを希ひ玉ふたのである。けれども大鷦鷯皇子はどうしても御即位がない。そんな次第にあつたから、人民はどちらが天皇だか、定めがつかないので、どうしてよいか宙宇に迷ふ有様で、はては貢を上りても納れられず泣き哭ぶ者さへあつた。そこで稚郎子はどうしても自分が生きて居ては、兄皇子の御即位にならないのを覺り遂に自殺して果て玉ふた。大鷦鷯皇子は大いに哭泣せられ、己れの志の達せざるを嘆ぎて、なほ皇位に即くのを肯じ給はない。そこで例の王仁が一首の歌を造りて、即位を勧め奉つた。其の歌は、

難波津に咲くや此花冬ごもり、今を春べと咲くや此の花

とて有名の和歌である、それで大鷦鷯皇子も、人民の切なる哀願に勝ち給はずして皇位に即かせられたのである。是れを即ち仁徳天皇である。

高 津 の 宮

(紀元九七三年)

仁徳天皇は應神天皇の第二の皇子にして、即位の先年攝津國難波に都せられた之を高津の宮と申す。天皇仁慈にして民を愛し給ひ、四年天皇高臺に上りて、四方を遠望せられ、人煙の稀少なるを見て民の貧しきを知り、三年の間課役を免じ用度を儉にして、ひたすら民の富み榮えんことを希ひ給ふた。後三年にして再び遠望し給ふに、炊煙盛んに起るを見たまひ、大いに悦びて皇后に宣まはく、朕既に富めりと。皇后磨之媛傍らに在りていふ、今宮室は壞れ、雨は漏り、御宮の垣も崩れて居りますのに、どうして富めりと申されませうかと。天皇は、いやとよ天の君を立つるのは百姓の爲である、されば君は百姓を以て本とせねばならない、それで百姓の貧しいのはとりも直さず朕の貧しいのであつて、百姓の富めるは即ち朕の富めるのである。今四方を眺むれば、民の烟が盛んに起つて居る、まことに喜ばしいことではないか、と仰せられた。百姓は此の事を洩れ承り、何れも聖徳の高きに感激し諸國の人民争ふて宮室を修理せんことを請ふたけれども、中々に御聽しがたい。後

三年にして始めて課役の科し、宮室を造られたから、人民は大いに喜び、老幼相扶け、日夜骨身を惜まず力を盡したので、幾ばくもなくして、立派な宮殿が出来上つた。

高き屋に上りて見れば煙立つ、民のかまどは賑はひにけり

とは後世の人が、天皇の御聖徳を頌し奉つた歌である。天皇はまた種々の事業を興し給ひ、殊に開墾のことに注意せられ、所謂難波の堀江を通じ、また茨田堤を築き河内の和理池を造り横野堤を築き、其の他橋を渡し、大道を造り又大溝を掘り、石川（河内）の水を引きて諸所の郊野を潤し、大に土工を起されたから、百姓はますます饒に、凶年の憂なく、是れより難波の都は愈々繁榮して面目頓に一新したのである。即位の八十七年崩御遊ばされた。實に天皇の如きは歴代帝王中、稀に見る明君であつて、その御仁徳の高き、御器宇の大なる、他に其の比を見ないのである。後世『仁徳』と諡して、其の聖徳を傳へたのは、誠に其の當を得たものといはねば

ならぬ。

眉 輪 王 の 變

（紀元一一一六年）

第十六代仁徳天皇より、履仲、反正、允恭三帝を経て、第二十代安康天皇に至る。天皇は石上の穴穗宮にて天下を治め給ひて、穴穗天皇と申し上ぐる、此の御代に所謂眉輪王の變が起つた。

初め天皇は、大草香皇子の妹幡檢姫を聘して、皇弟大泊瀬皇子の妃とせんとし給ひ、根の使臣を遣はして之れを請はしめられた。大草香皇は之を聞きて大いに喜ばれ、珠鬘とて皇子の珍重せられたる寶物を根の使臣に託していはるゝに輕少の物だが、婚姻の證據に差上げて下さいとて、其の異心なきを表された。ところが惡いものは此の根の使主で、其の珠の如何にも美しくしいところから俄に慾心が起り、横取して己が寶となし、天皇には之れを差上げない、さうして云ふには大草香皇子

は詔を奉じませんと、天皇に讒した。天皇は根の使主の讒を信じて大いに怒り、兵を遣はして之れを殺さしめ給ふた。まことに憐れなるは大草香皇子で、憎むべきは根の使主である。然して根の使主は直ちに悪事が發覺して天誅を加へられた。さて大泊瀬の皇子は、其の初志を達して幡梭姫を娶られたが、大草香皇子の子眉輪王は、當時年未だ幼なく宮中に養はれて居たが、父が無實の罪で殺されたのを無念でならない。折もあらば天皇を弑せんと、つけねらつて居つたが、一日天皇は皇后と共に御酒宴があつて酔つて皇后の膝を枕とし、其のまゝ一睡せられた。時こそよければと眉輪王はそつと忍び寄り、天皇を弑し奉た。此の時大舍人が直ちに馳せ出で、急を大泊瀬皇子に告げたので、皇子は大いに驚ろき、其の兄の黒彦皇子の許に至り相談せられたけれども、冷然として取合はない。そこで今度は次兄の白彦王の許に馳せ付け、同様に意見を問ふて見たけれど、後難を恐れて、相談に乗らない。そこで大泊瀬皇子は其の無情を怒り、刀を抜きて二兄を殺し、直ちに兵を興し、眉輪王

の遁れたる大臣、葛城の圓の家を圍み、火を縱ちて其の邸を焼き盡したから王及び大臣は遁るゝ所はなく、燔死したのである。大泊瀬皇子は即ち後の雄略天皇で、武勇に勝れ氣象逞ましく、嘗て葛城山に獵して大きな野猪を蹴殺し給ふたことは有名な話である。そこで時の人が帝を恐れて、大惡王といふ御名を奉つた程である。けれども天皇は決して暴惡無道の帝王でなく、殖産工業を勸められ、殊に蠶桑を奨励せられ、大いに民福を圖り給ふたのである。その事は項を改めて説明する。

蠶桑の奨励

(紀元一一三〇年)

雄略天皇は大いに殖産工業を奨励せられ、皇妃をして親から桑を採らしめ、養蠶を勸め給ふた。それは天皇が當時の衣冠を改正したいとの御希望があつたので侍臣に命じて國內の蠶兒を集めしめ給ふた事であつた。ところが栖輕といふ侍臣が、其の命を聞き違えて、多くの嬰兒を聚めて來て天皇に奉たから、天皇は大いに笑は

せ給ひ、折角拾つてきたものだから、そなたが養育するがよいとて、小子部連の姓を賜はつた。天皇即位の十四年、吳の使人來り、漢織、吳織の職工及縫工を献じたので、天皇は衣縫部を大和の飛鳥と伊勢とに置き、彼の應神天皇の朝に歸化した融通王の後である、秦氏の諸國に分散するものを求めて、一萬八千六百七十人を得之れに酒食を賜はりて後ち養蠶業或は絹織物に従事せしめ給ふた。されば其の結果は空しからず、山の如くに絹織物を織り上げ、朝廷に貢進したので、天皇大いに嘉賞せられ、大秦の號を賜はつた。天皇また諸國に桑を植ゑしめ、養蠶を勸め、庸、調を献せしむる等、大いに國利民福を圖り給ふたのである。されば天皇は決して強暴の君ではなく、經世の術に富まれた、名君と申さねばならぬ。

億計と弘計

雄略天皇は、先帝が嘗て市邊の押盤皇子に天位を傳へんとせられたのを怒り、皇

子を獵に誘ふて、之れを殺し給ふたことがある。其の時皇子に二子があつて兄を億計王、弟を弘計王といふ、共に播磨國に走り給ふて、民間に下り、奴となりて難を遁れ給ふて。赤石郡縮見の屯倉の首である、忍海部の細目の家において牛馬を詞養して居られた。時に伊與來目部小楯、播磨の國司に任じ、赤石郡を巡りたまへ細目が宅に來つて、其の酒宴の席に列なつた。其の時弟の弘計王が兄の億計王に向つていはるゝには、吾等兄弟亂を遁れて、此の家に隠れてより、多く年月を経ました、今まで包み隠した名前を打明けて、尊き身分であることを知らせるには、今夜こそ尤ともよき機會であります、兄さんどうでせうと。兄のいふ、なまじに名を出して害せらるゝより、今まじ通り包み匿して、身を全うしたがよいと。弟のいふ、それは兄さん餘りに殘念です、皇孫の尊き身を以て、賤しき者の下部にあらんよりはむしろ名前を顯はして、害せられた方がましでせうとて、弘計王は無理に兄王に勸め兩人感極まり互に相擁して泣くのみであつた。さて其の夜酒宴がはじまつたが、其

の時燭を乗りて左右にあつた二人の王子は、小楯の勸めで舞ふたとき、弘計王歌いて曰く、

いたむしろ河そひ柳水ゆけば、なびきおきたちそのねはうせず

と高らかに聲をあげて舞はれたので小楯は奇異に思ひて、更に唱はしめた。

そこで弘計王は襟を正し、小楯に向つていはるゝには、我々こそは、市邊押磐皇子の遺兒であるぞよと。小楯大いに驚ろき、室内の人を遂ひ出し、再拜して敬意を表し、急ぎ郡民を集めて宮を造り二皇子を安置し、是に於て小楯は急ぎ京師に歸り其の由を朝廷に奏した。時に第二十二代清寧天皇の御代であつたが、不幸にして此天皇には未だ御繼嗣がない。されば朝廷にては早速使を遣はして呼び迎へられたが、清寧天皇崩せられ玉ふに及びて、兄弟互に相譲りて即位がない。それで姨の飯豊の皇が、一時朝政を執られた、けれどもこれも程なく崩御になつたので、是非とも二皇子の内て即位せられねばならない事となつた。其の時兄の億計王は、今日我々

が斯くの如くなつたのは、偏へに弘計王の計ひである。それで弘計王こそ御即位になるべきであると勸められたから、弘計王も止を得ず、遂に帝位に即かせられた。之れを顯宗天皇と申し、天皇崩御の後、億計王之れに代らせられ、之れを仁賢天皇と稱する。此の兩帝は久しく民間に在りて、下情に通ず玉ふたので海内皆悦服し、大平であつたと云ふ事である。

佛 教 の 渡 來

(紀元一二一三年)

佛教は、はじめに繼體天皇の十六年に梁の人司馬達等といへる者が、大和に來り、堂を建て、佛像を安置し、之れを禮拜したことがあつたが、當時の人は之れを蕃國の神であると誹つて、之れを信する者はなかつた。然るに欽明天皇の十三年十月百濟の聖明王、使を我國に遣はして、金銅釋迦佛像一體、幡蓋若干經論若干を獻じ、其の功德を述べていふ、此の法は諸法中最も殊勝なものであつて解し難く、

入り難い。されば周公、孔子と雖も、尙ほ此の法の微妙を知ること出来ぬ。此法能く無量無邊の福德果報を生ずるにより、遠く弘通して天竺より三韓に及んで居る。それで百濟王、臣、明謹んで之れを献ずるのであると。天皇は之れを聞き歡喜して宣はく、朕昔より未だ嘗て、是の如き微妙の法を聞いたことはないとして、群臣を召して問はるゝには、西より献じた佛の相貌、甚だ端嚴である。禮拜すべきか、否やと。大臣蘇我稻目奏していふ、西蕃諸國既に之れを信ずる、然るに我國のみ獨り背くことは出来ずまい。と大連物部尾輿、中臣鎌子は之れに反對していふ。我國は既に天地社稷の神があらせられる。今改めて蕃神を拜したら必ず國神の怒りに觸れませう、およしなさるがよろしいと。天皇はそこで禮拜を憚り、佛像を稻目に賜はつたから、稻目は大いに喜び、向原(河内)の家を捨て、寺となし、之れを禮拜した。これより崇佛派の蘇我稻目、馬子父子は排佛派たる物部尾輿及び其の子守屋等と互に軋轢しはじめた。然るに其後、國中に疫病流行して、民の死する者が

多かつた。尾輿、鎌子等は、これ必ず崇佛の祟りである、早く之を棄て、後福をお求めになりますやうと奏して、佛像を難波の堀江に投じ、復た火を放ちて寺を焼き盡したから。蘇我の一派は大いに怒り、こゝに敬神と崇佛兩派の争ひはますます激烈となつた。然るに佛敎の傳來は、また同時に新文明の輸入を伴ふに至つたから上下みな之れを歡迎し佛敎は日一日と世間に流布し、到底人力を以て防ぎとむることができなくなつたのである。

調の伊企儼

(紀元二二二一年)

佛敎興隆のことは、しばらく後として、茲に一人の快男兒を紹介する。快男兒とはたれ、すなはち調の伊企儼である。欽明天皇の二十二年新羅より貢を上つた。然るに新羅は度々我國に無禮な仕打を致したから、朝廷では其の亡狀を憎み其の待遇を減じ、わざと百濟の下に置くことにした。こゝに於て新羅の使者は怒つ

て、館舎に入らず、國に還りて其の由を國王に奏したので、國王は直ちに新羅城を築き、また兵を發して任那の日本府を滅ぼした。そこで日本にては紀の男麻呂を太將軍として河邊瓊缶を副將軍となし、以て新羅を伐しめた。而るに瓊缶等は軍令を守らず、勝に乗じて無暗に進んだから、忽ち捕へられて虜となつた。同時に調の伊企儼も亦捕へられたが中々剛者であるから決して降らない。そこで新羅の將が刀を抜いて之を斬らんとし、禪を脱せしめ、臂部を日本に向けしめて、大に叫ばしめて曰く、日本の將我が臂肉を食へと、伊企儼即ち叫んでいふ新羅王我が臂肉を食へと、豪語して罵り返し、眼中敵なく傍若無人の有様であつたから、新羅王大に怒り、遂に殺されたのである。其の子舅子亦父を抱きて死し、其の妻の大葉子も擒にせられたが、大葉子は夫の死を悲み、愴然として歌ひて曰ふ、

韓國の城の邊に立ちて、大葉子は、領巾ふらすもよ、倭へ向きて
と嗚呼伊企儼の如きは、眞に日本男兒の眞面目を發揮したるものといふべく、其の

精神凜として奪ふべからず、まことに壯烈である。假令新羅征伐は何等の効はなかりしにもせよ、其の伊企儼の死によつて、敵將の肝膽を寒からしめ、我が大和魂を示したる、毅然たる其の精神は永く青史に残りて、懦夫をして起たしめ烈夫をして奮はしむるに足るのである。

聖 德 太 子

(紀元一二五三年——一二八一年)

さて佛教興隆につき述べるが、抑も佛法がかくの如く、非常の勢を以て進んで來たのは、實に聖德太子の力によるのである。太子名は厩戸、用明天皇第二の皇子にましまし、幼にして聰明、所謂一を聞き十を知るの才があつた。されば豊聰耳宮太子とも稱せられた。天皇深く之れを愛し、宮南上殿に居らしめ給ふたから、亦上宮太子とも稱する。太子十五歳の御時、天皇は崩御になつたが、其の臨終の際は日夜看護につとめ、ひたすら三寶(佛法僧)に祈請し給ふた。太子はかく非常に佛教

を御信心になつたから、かの蘇我の馬子と力を協せて、遂に反對黨の物部守屋、中臣勝海を滅ぼし、守屋の財産や田宅を没收して、寺を建て、四天王の像を安置した。用明天皇崩じ崇峻天皇即位せられ、痛く馬子の暴逆を憎みて之れを憤ほらせ給へる時、太子は之れを諫められ、其の儘思ひ止まり給ふたが、後ち天皇が馬子の爲めに弑せらるゝに及びても尙ほ太子は馬子に悖らひ玉はず、是れ過去の報なりとて、嗟嘆せらるゝのみであつた。一面からいへば、太子は馬子の大惡無道を責めず、隱忍せられたのは、如何にも君臣の大義を知らぬ、非常識の方の様ではあるけれども、是れ全く馬子を助けて佛法を興隆し給はんとの志があるからで、とりも直さず佛法感溺の結果であらう。かくして崇峻天皇は馬子の爲めに弑せられ。推古天皇即位せられ、即位の元年、二十一歳にして皇太子に立ち、萬機の政を攝せられた。これより馬子と力を協せて、政を行ひ、曆法禮式を定められ、冠位を制し、國史を撰び、憲法を發布せられたるなど、なか／＼の大事業をはじめられた。殊に憲法十七

ケ條の制定は、空前の計畫で、政治上に多大の功績を残され、永く後世に範を垂れたのである。太子また能く内外の經典に通じ、種々の經文に註釋を試み給ひ、諸所に大寺を建てられたが、四天王寺、法隆寺、法興寺等など何れも有名である。就中大和の法隆寺は六歳の年月を閲して、でき上つたもので、玉蟲の厨子や曇徴の壁畫などは今尙ほ寺内に残り、我國の美術品として優に誇り得べきものである。大和地方に旅行せらるる事があつたならば、必ず法隆寺に遊び、寺内の美術品を一見せられたならば如何に其當時日本の美術工藝が進んで居たか、其一斑を想像することを得て、大に有益の参考にならうと思ふ。さて太子は天皇の二十九年斑鳩宮に薨せられた。御年四十九、人民みな哀悼して泣き哭んだといふことである。兎に角太子は人格の上に於ては非難もあるが、その佛法を興して、我國の美術工藝上に一大進歩を興へ、且つ政治上空前の改革を施し、多大の功績を残されたことは實に國民の感謝すべき所であつて、たしかに國史上の一大人物である。

遣 唐 使

(紀元一二六七年以降)

遣唐使とは、支那の唐朝の時に、我國より派遣されたる公けの使節であつて、抑もその始まりは、推古天皇の十五年に小野妹子を隋に遣はされたる時であつて、其の翌年歸朝し、隋よりは文林郎裴世清等十二人が妹子に従つて來朝した。その十六年裴世清等歸國の時に、朝廷再び妹子を大使となし、吉士の雄成を副使として、隋に派遣された。其の時隋朝の文物制度を實地に就て視察せしむるために高向玄理等四人を留學生とし、他に學問僧四人を之れに附隨せしめられたが。翌十七年妹子等は歸朝した。そうして留學生、僧侶等は隋に渡り、支那文明を研究して歸朝し、我制度に少からず貢獻をしたので、こゝに新文明の種子は我國に植ゑ付けられたのである。それから天皇の二十二年にも亦遣唐使を派遣され、後隋亡びて唐朝の世となりて、遣唐使をはじめ留學生は絶えず派遣せられ、盛んに唐朝の文明を吸収した

のである。そうして是等の人々は歸朝して、我政治上の原動力となつたので、或は大臣に任せられて、施政の上に大革命をなし、大いに面目を一新した。されば中には彼國の文人に劣らぬ程の學者が輩出した。小野篁、阿部仲麿、吉備真備等の如きは最も有名の者である。其の他僧侶にも名高き傑僧が出で、歸朝して一宗を興したもののさへある。即ち最澄、空海の如きは其の一例である。かくして絶えず派遣せられたが、字多天皇の朝參議菅原道真が、大使に任せられたとき、當時唐が亂れて危険なる由を奏上したので、是れより亦派遣の擧なく、支那との交通はしばらく中絶したのである。

蘇我氏滅ぶ

蘇我氏は武内宿禰の子石川宿禰より出で、宣化天皇の朝、蘇我稻目大臣となり子孫世々大政に與り、一族鼎盛であつた。稻目より馬子、蝦夷を経て入鹿に至る四代

の間は、中々専横を極めたものであつて、遂に天子を殺し奉るに至つたのである。殊に馬子の如きは、大道無道であつて、暴逆言語に絶し、崇峻天皇が即位せられたが、天資英邁にして、深く馬子の専横をお憎み給ふて、厩戸皇子に謀りて之れを除かんと企てられたが、皇子の御諫によりて止まり給ひしも、馬子の如きものがありては、穀慮の儘にならないので、折もあつたらば之れを、誅せんことを思召されたのである。天皇即位の五年に山猪を献するものがあつた。其時天皇の仰せらるゝには、此の猪の頸を斷るやうに、朕が嫌ひな者を斬りたいものだ。馬子はこれを聞き、大いに恐れて東漢の駒といふ者をして天皇を殺せしめた。推古天皇の朝に、厩戸皇子が太子となり、萬機を攝せられしも、その實權は馬子の掌握する所である。馬子死し、蝦夷の代になりても、其の暴逆愈々募り、推古天皇崩御して、皇子未だ定まらず、蝦夷は田村皇子を立てんとし、叔父の境部摩理勢は山背大兄王を立てんとし、互に争ふた。蝦夷は叔父の違拒を怒り、兵を遣はして之を殺し、田村皇子を擁立した

これ即ち舒明天皇である。爾來益々僭越にして皇極天皇の時には、廟を葛城高宮を建て、また豫め墓を築き一を大陵と稱して己が墓となし、他を小陵と稱して父入鹿の墓になし、大いに國內の人民を苦めた。蝦夷の子入鹿の代となり、威勢大に過ぎ群臣みな戰慄した。皇極天皇の朝、山背大兄王等の威名重きを恐れ、王子斑鳩宮に襲ひて之を殺し、専横の極、蝦夷の家を宮門といひ、己が家を谷宮門といひ甘櫛門に邸宅を營み、男女の子を王子と稱し、城柵を作り兵庫を建て、殆んど天子を凌ぐに至つた。時に中大兄皇子英邁にして深く入鹿の不臣を憎み、中臣鎌足と謀りて之を誅せんことを計畫し、其時機を待つて居られたが。天皇即位の四年との三使節來り貢を上げた。時に天皇大極殿に出御し入鹿も亦其側に侍した。時こそよけれと中大兄皇子は、自ら槍を執りて殿側に隠れ、中臣鎌足は弓矢を携え韓養網田に劍を授けて之を斫らしめた。倉山田麿、三韓の表文を讀み終らんとする時、中大兄皇子不意に躍り入りて入鹿を斬り給ふ。入鹿御座に近づき、傷きながら

天皇に哀訴した。中大兄皇子即ち伏奏していふ。入鹿不遜にして將に天位を傾けんと致す、よつて之を誅するのであると、天皇起ちて内に入らせ給ふたから、網田は遂に入鹿を誅し、其屍を父蝦夷の許に送つたので、蝦夷は最早逃れぬものと覺悟し、家を焼きて自殺し、蘇我氏の一族悉く滅びたのである。かくして、専姿横暴を逞ましくしたる、蘇我氏誅滅せられ、中大兄皇子は立つて太子となり、是より施政に大革命を企てられ、我國史上に一時期を劃したる、所謂大化の改新となつたのである。

大化の改新

紀元一三〇五年—大化元年

蘇我氏誅に伏し、豪族其の跡を絶ちて天下靜謐に歸したるを以て、英邁なる中大兄皇子は、中臣鎌足と謀り孝徳天皇を擁立し、茲に政治上の一大革命は行はれたのである。先づ天皇即位の日、中大兄を皇太子となし、阿倍内麿を左大臣に、蘇我の倉

山田石川麿を右大臣に、中臣鎌足を内大臣に任じ、皇極天皇の即位四年を大化元年となして、始めて年號を建てられた。同年八月、國の國司等を戒諭して宣まふよ。國家の公民、大小所領の人衆は皆戸籍を作り、田畝を校し、園池水陸の利は百姓と俱にせよ、國司は罪を判ずることを得ず又賄賂を取することを禁ずる。之れを奉ずるものは賞し、違ふものは爵位を降す、なほその蝦夷地方と境を接するところに、常に兵を集めて萬一に備ふべしと。また使を諸寺に遣はして、僧尼を校し諸國の人口を録せしむる等々改新の準備を行はれ、いよく二年正月、改新の大詔を發せられた。其一是子代の民、處々の屯倉、部曲の民、處々の田莊を罷め、太夫以上には食封、官人百姓には布帛を賜ひ、且つ世襲の領地を收めて俸祿に代へたること。其二には京師を修め、畿内には國司、郡司以下の官を置き、山河を定め、京には坊毎に長一人置き戸口を檢べ、姦非を察し、畿内の區域を定め、郡を大中小の三郡に分つこと、其三は、戸籍計帳を造り、斑田收授の法調を定め。其四、賦役を停

めて田の調を行ふこと等である。かくして政治の大綱は備はつたので、天皇は更に風俗稿正に關する詔を下された。越えて三年十三階の官位を制定し、五年改めて十九階となし、また八省百官を置き給ふたのである。此に至りて官制を改革し大臣を置き、從來の封建政治を一變し、郡縣の治を施し給ふたのである。要するに大化の改新は、從來族制専ら行はれて、朝廷の政治が行はれないので、之を廢して郡縣の制となし、威令を全國に及ぼさんと御主旨であつて、それから一つは内を修めて、三韓を歸服せしめようとの大御心に基づいたものであらうと思ふ。此改新は武家政治、明治維新と相待つて我が國に於ける重要なる政變であるからよく之れを記憶せねばならぬ。

阿倍比羅夫

調の伊企灘に次で、亦一人の豪傑が在つた。その豪傑とは誰れであるか、齋明

天皇の御世に肅慎の國を討し、天晴日本男兒の名を揚げた阿倍比羅夫である。そも肅慎の國とはどこであるか、詳かではないけれども、多分北海道の北部或は樺太方面に住んで居つた、外國人種であらうとの事である。欽明天皇の五年肅慎の國人が、佐渡の國御名部埼に來つて、魚を捕へて食し、それより瀬名河浦に移つたが水を飲で、中毒し死するもの甚だ多くあつて、其屍が海岸に山をなしたといふことがあつた。比羅夫は齋明天皇の御世、蝦夷がしばしば邊境に冠をするので、之を討せんがため詔を奉じて其四年舟師百八十艘を率ゐて、蝦夷を討ち、之れを征服し、其五年に又もや舟師を率ゐて蝦夷を征伐し、後方羊蹄の地を政所となし、郡領を置いて歸つた。また比羅夫は北蝦夷を嚮導とし、四年六年に二度まで肅慎を討じ、四年には肅慎より生熊二、熊皮七十枚を献じ、六年には三十九人を虜にして歸つた。前後數回、外征して功を建てたのはまことに珍らしい事で、餘程の豪傑であつたと思はれる。時に三韓は高麗、百濟共に振はず、新羅のみが獨り強盛にして、他の二

國を壓迫し且つ我國にも度々叛いて、いふことを聞かないので、今の内に高麗、百濟を助けて、新羅を討つたがよからうと云ふ事になり、殊に百濟は新羅と地を争ひて攻戦絶えず。爲めに百濟の運命の危ふからんとする有様であつたから、我國にては急ぎ百濟救援の軍を出し、阿倍比羅夫は征討の將となりて新羅を討じ、また大功を建てた。比羅夫は後ち凱旋して高官に任せられ、其武功は永く傳へられたのである。調の伊企灘といひ、阿倍比羅夫といひ何れもそろつて、海外に名を轟かしたのである。

中興の英主

(紀元一三三二—一三三一年)
白雉元年—白雉一〇年

齋明天皇崩じ給ひて、中大皇兄子御即位あらせられた。是れ即ち天智天皇である。天皇都を近江の大津に遷され、在位僅かに四年に過ぎなかつたが、其の功績は數へ切れない程であつて、皇極天皇の朝には、蘇我入鹿を誅せんがため、蘇我倉山田

石川麿の女を納れて妃とし、以て其の後援となし、藤原鎌足と謀りて、三韓入貢を機として、大極殿に之を誅し、豪族跋扈の跡を絶ち、孝徳天皇の朝には天皇を輔けて朝政を執り所謂大化改新の政を布かれ、齋明天皇再祚せらるゝに及びても、なほ皇太子として新羅征討の軍を興して、筑紫に水城を築きて之に備ふるなど、前代に比類なき大功を建て給ふた。齋明天皇崩じ、五年の間素服して位に即き給はず。五年の後漸く御即位あらせられたのである。それで天皇として君臨せられしは、僅かに四年に過ぎない。是よりさき百濟は既に亡び、高麗また滅びて三韓は全部朝貢せざるに至り、我國との關係全く絶たれたから、天皇は是より意を内治に注ぎて、ひたすら大化改新の實を擧げんことにつとめられた。天皇はかく前代の制度を改めて郡縣制となし、改新の大業を建て、我國の政治に一新時期を劃するに至つたから、後世之を中興の天皇と稱し奉たのは、まことに至當である。

大織冠鎌足

(紀元一三二九年)

天智天皇に次いで記憶せねばならぬ人物は、藤原鎌足である。すなはち天皇の御事業は、みな鎌足の畫策せるところであつて、天皇の御功績を大ならしめたのは、とりも直さず鎌足翼賛の功多きに居るのである。鎌足、本姓は中臣氏、天兒屋根命の裔であつて、皇極天皇の三年に神祇伯に任ぜられたけれども、病と稱して之を辭し、攝津の三島に退隱した。當時孝徳天皇は輕皇子と稱して潜龍せられしとき、鎌足は大いに皇子の知遇を受け他日必ず之れを天子に戴かんことを期して居つた。時に蘇我入鹿が專横にして不臣の心あるを憎み、之れを除かんことを期し、諸皇子の中有爲の方を物色し、中大兄皇子の英邁なるを見て、之れに近づかんとして其の機を伺つたが、たましく蹴鞠の際、皇子の脱せられたる御靴を捧げ奉つたのが縁となり、共に胸襟を披いて談じ、互に意氣投合して、將來を盟ふに至つたのである。け

れども餘りに親しくしては疑を受くるの恐れがあるからとて、聖賢の道を南淵先生に學ぶに託して、車中共に大事を談じ、ただ其の機に至るを待つて居た。時に皇子は鎌足の勧めにより、石川麿と婚を結び、之れを後援となして、遂に入鹿を誅し得たのである。次で皇極天皇は位を中大兄皇子に譲らんとし給ふたが鎌足は皇子に脱きて一先づ輕皇子に譲らしめた。輕皇子は中大兄の舅君であるのと、且つは鎌足が嘗て知遇を受けたから、之に報ひんと心から中大兄に先ち、之れを立てたのである是孝徳天皇である。孝徳天皇即位して鎌足を内臣となし、大錦冠を授け給ふたさうして大化改新の事業は、みな鎌足が中大兄皇子を輔けて、畫策せる所である。天皇はただ其の命令者であつて、政治の實權は皇子と鎌足の二人が掌握して居つたのである。天智天皇即位の二年十月に鎌足重病に罹つたとき、天皇は親しく病を訪はれ、勅して藤原の姓を賜はり、大織冠を授け内大臣に任じ給ふた。同月遂に薨じたので朝野みな哀悼したといふ事である。遺骸は大和の多武峰に葬り今は別格官

幣社に列せられて、談山神社と稱し、萬人の崇敬を受け、大和地方の一名所として人口に膾炙して居る。其の子不比等父の餘徳を享けて、また大臣の高官に登り、子孫相繼で朝政を執り、後世の所謂藤原時代を現出したのは是れ全く鎌足の偉功によるのである。

壬申の亂

(紀元一三三二年)
白鳳元年

天智天皇は多くの諸皇子があらせられたが、其の中にも大友皇子は天性御利發にして、天皇の寵愛も深く、天皇讓位の後は之れに皇位を傳ふる御思召であつたのである。然るに當時國家多難にして諸皇子まだ幼冲であつたから、天皇も群臣の諫めにより、止むを得ず皇弟大海人を立て、皇太子とせられた。もとより天皇の御素志ではないことは申すまでもない事である。それで天皇と太子との間は常に御不和であつて、どうしてもうまくいかない、度々御争ひもあつたやうであるが、天皇御在

位中はまづ、大事に至らずしてすんだが。天皇の崩後太子と大友皇子の間に衝突を生じ、延ひて國家の大亂となつたのである。はじめ天皇病に罹らせ給ひ、後事を託せんとして太子を召され、我が亡き後は皇位を繼ぐ様にとの仰せがあつた。けれども太子は、かねて天皇が大友皇子に御心のある事を知つて居られるので、體よく御断りしていふには、臣は不幸にして多病でございませぬ、それでどうぞ大友皇子に皇位を御傳へになつて下さい臣はこれから世を遁れて出家得道し、陛下の爲めに御功德を祈る考がへでございませぬ。此の詞を聞きて、天皇は内心お喜びで、早速御勅許になつたが、大海人皇子は一時の申譯のために髪を剃りて出家し、大和の吉野の宮に入られた。それで天皇の崩御あらせられてから、大友皇子は、大海人皇子に代りて皇位に即き給ふた。これぞ弘文天皇である。さてそれにて無事にすめば天下は太平だが、胸に一物ある大海人皇子は、内々勢力を蓄へて、時機の到るを待つて居る。それで時の人は評していふ、これ虎に翼を附けて野に放つものであると、果

然大海人は虎となりて、大いに天下を騒がしたのである。そこで弘文天皇も萬一の變に備へんがため、山陵を起すと稱して、密かに美濃、尾張地方の兵を募集せられた。大海人皇子に於ても吉野に在りて、擧兵の準備に怠りなかつたので、天皇が兵を集め且つ吉野の糧道を絶たれたことを探知し、先づ東國に據りて近江を襲はんとし、皇子は天皇即位の元年六月二十四日吉野を發し不破、鈴鹿の山道を塞ぎ、兵を進めて桑名に至つた。それより吉野軍は連戦連勝の姿で、七月二十二日には長驅して瀬田に到り、近江吉野の兩軍互に河を隔て、陣し、兩軍大いに戦つたけれども、勢官軍に利あらずして、官軍の諸將皆戰死し、天皇も一旦は山中に遁れ玉ふたが、進退茲に窮し、あはれ二十五歳を一期として、自ら縊れて崩じ玉ふたのである。あゝ九五の尊を以て此末路を見るに至る。史を讀んで茲に至れば、吾人は實に涕淚滂沱たらざるを得ないのである。そも此役の皇軍の敗に歸した重なる原因は種々あらうが、大海人皇子が、吉野にありて、かねて勢を扶植し、充分の戦闘準備をし

て居たのと、弘文天皇の妃は大海人皇子の女であつて大海人の二皇子も吉野に在りて、密かに内通したる形跡のあること、群臣がかねて望みを囑して居た大海人皇子が、吉野に遁れ、弘文天皇の即位があつたので、之れに不満を懐けるもの多かつたこと等が、其失敗の重なる原因であらうと思ふ。かくして弘文天皇崩じて、大海人皇子即位せらる。是れ即ち天武天皇である。

律 令 の 撰 修

(大元一三六二年)
紀 實 二 二 年

茲に行政の根本たる律と令の成立ち、ならびにその變遷につき述べて見たいと思ふ。律、令共に朝廷の編纂に係るものであつて、律とは今の法律であつて、罪人を罰するおきてで、令とは諸命令で、諸般の制度を大小となく、規定せるものである。抑も上古敦朴の世は、天下所謂太平であつて、朝廷の命令はよく行はれ、律令等の必要はないけれども、世が進むに従つて複雑となり、上古の様に簡單な政治によるこ

とは出来ないもので、勢ひ此の律令等の發布を見るに至つたのである。推古天皇の十二年、聖德太子が所謂憲法十七ヶ條なるものを發布せられたけれども、これはむしろ教訓的のもので律とも令ともつかぬものである。降て天智天皇の御世に近江令十二卷を選修せられたことが古史に記してある。然し惜しいことには、それが今傳はらぬので、其の成否さへ詳かでない。更に持統天皇の三年に、近江令を諸司に頒たれたといふことである。文武天皇の四年に、藤原不比等に勅して、律令を選定せしめ、大寶元年に之を發布した。律六卷令十一卷にて之を大寶律、大寶令と稱する。然るに養老二年に至り、更に之を刊修せしめられたのである。之を養老律令と稱して居る。かくして其後もたび／＼之に改正を加へて、不備を補なつた様である。すつと降りて後世に至りて、武家式目だの武家諸法だのと、其の時代々々に相應な法令が出たのであるが、其源は大寶令によつた所が多いから、よく之を記憶して置かねばならぬ。其律や令の詳細は、それは専門的に研究せらるゝ時、自然

と會得せらるゝであらうから、茲では之を省くこととして、次には我國の古い歴史即ち古事記や日本紀の成立につき述べやう。

國史の始め

(古事記 紀元一三七二年—和銅五年
日本書記 紀元一三八〇年—養老四年)

我國で最も古い歴史は何かといへば一般の知らるゝ古事記である。其古事記はどうして出来たか、どんなものであるか、國民たるものは是非とも、之を知るの必要がある。抑も太古には、文字といふものがないので、みな口から口に傳へて記憶して居たものであるが、然しそれだと、どうしても訛りを生じ易い、それで天武天皇は、國史の選修を思ひたれ、即位の十年三月川島皇子以て羣臣を召して、上古の諸事を記載せしめられた。然るに、天皇は別々舎人稗田阿禮といふものに勅して、いろ／＼な舊事を誦習せしめ給ふた。時に阿禮年二十八、博覽強記、聰明にしてよく舊史に通じて居たといふことである。然るに其後天皇崩せられ、阿禮も年老いて

きたから、元明天皇の和銅四年、大安萬侶に詔して、我が國の開闢より推古天皇までの舊事を阿禮に就て筆記した。これ即ち古事記である。當時片假名や平假名等の便利がなかつたから、漢文にて所々に邦語を書き入れ、いはば和漢文の折衷ともいふべきものが出来上つた。それは初學者には一寸讀みにくい但其文體は質實で中々に面白く出来て居る。都合三卷より成り、上卷は天地開闢より鶉草葺不合尊のあたりまで、中卷は神武天皇より應神天皇の時代まで記してある。次で元明天皇の和銅七年二月紀清人、三宅藤原に詔して、また國史を選ばしめ給ふた。是れを日本紀と稱する。然し惜しいことには今は傳はつて居ない。やはり古事記に類した文體であらうとの事である。然るに元正天皇の養老四年、更に一品舍人親王に勅して新に國史を編纂せしめられた。これぞ即ち日本書記である。紀三十卷系圖一卷より成り、漢文で書かれてある。内容は神代より持統天皇までの史實を記してあるが、神武天皇以下は、古事記より却つて精しいところもあるけれども、漢文體であるか

ら往々修飾したところがあるのは、如何にも缺點である。此の古事記と日本書記を併稱して、記紀といつて、我國古史の雙壁として珍重されて居るから根本的に古い歴史を研究せんとするには是非とも此の兩書によらねばならないのである。

平 城 の 宮

(紀元一三七〇年
和銅三年)

昔は天皇の御世が改たまる毎に、皇居も改まりて、一定の都といふものがなかつたのである。持統天皇に至りて藤原宮に都し給ひ、文武天皇も此地に在したが元明天皇の朝、藤原宮が帝都として如何にも不便なところから、茲に遷都の議が起り、和銅三年三月、始めて都を平城に遷し給ふたのであるが、此平城宮は光仁天皇まで七代引つゞいて都し給ふたから世に之れを平城七代と稱する。尤も其の間に聖武、稱徳兩帝などは各地に宮殿を造られ、一時は遷都の思召もあつた様であるけれど、民心が動搖するところから其の議も御沙汰止みになつたのであらう。平城の都は、

今の奈良市よりも、ずっと規模大きく左有兩京に分なれ、坊條を通じ、壯麗雄大であつたとのことである。當時の平城は文化燦然として、佛教の隆盛、美術彫刻の進歩其の極に達し、所謂「青丹よし、平城の都は、咲く花の、匂ふが如く、今盛りなり」と詠せられたる如くに、文明の花や文化の光が美しく咲き輝いて居たのである。さうして有名な奈良の大佛も實に此の時代の建立である。然るに桓武天皇の朝に、都を平安城に遷されてより、さしもの大都會も俄かに衰頹し、宮城や邸宅は取壊たれて、忽ち田畝と化し、あはれ平城七代の榮華も茲に一朝にして凋落し、春日の杜、三笠の山たゞ昔ながらの面影を止めて、在りし昔を偲ばしむるのみ。

井手の左大臣

(紀元一四一七年
天平寶字元年)

井手ノ左大臣とは橘諸兄の事であるが、諸兄は敏達天皇の御子難波皇子の曾孫にて美努王の子である。母は縣犬養三千代。諸兄初めの名は葛城王と稱して居たが天

平八年、母が橘姓を稱するところから、橘宿禰の姓を賜はらん事を請ふて允され、名を諸兄と改め、臣籍に下つたのである。時に豌豆瘡流行して、全國に蔓延し、藤原房前、同武智麿、同宇合、同麻呂相尋で薨じたから其の結果として執政の大臣たるべきものがなかつた。そこで十年の正月諸兄右大臣となり、さきに殺されたる長屋の子、鈴鹿王と共に政を與かつた。十五年には諸兄左大臣に進み十七年には鈴鹿王が薨じたので、其の後は諸兄獨り政權を執つて居たのである。天平勝寶中には正一位に進みて、位人臣を極め、天平寶字元年に薨じた。時に年七十四歳、朝廷哀悼、官葬を行はれ、其の功績を表彰されたのである。思ふに諸兄が橘姓にして、かく執政の任に當りて顯要の地位に登つたのは、其の才幹にもよるけれども、一つは藤原の四家の死に絶えたのと、また一は時の皇后光明子は其の同母妹で、光明子の妹多比能は、諸兄の室であるところから、藤原氏との關係も深く、従つて朝野の信任も厚かつたのであらう。

光 明 皇 后

(紀元一四二〇年)
天平寶字四年)

聖武天皇は、深く佛に歸依して、大佛をはじめ諸所に佛寺を建て、大いに佛敎の興隆に力を盡されたが、其の内助の功は、重に光明皇后にあるのである。皇后名は安宿姫、藤原不比等の第二女幼にして聰慧、天平元年八月皇后に冊立せられた。皇后は御貌殊に美はしく、光り輝やいてゐたといふので、光明子と稱したといふこととである。天資慈仁にして深く佛道を崇信し、皇后冊立の翌年には、天下の飢えたるもの、病めるものを療養せんがため、悲田院ならびに施薬院を置かれた。また天皇に勸めて東大寺を建て、其の六年には妍橘氏(橘三千代)のために、其の供養として、興福寺内に西金堂を建て、一切經を手書して之に納め四百僧を招して菩提を弔らつたといふことである。皇后は孝謙天皇即位の後、なほ皇太后としておはしたが、天平寶字四年六月に崩御あらせられたのである。御年六十、そもく天平時

代といへば、奈良朝の最も盛んな時代であつて、恰も百花爛熳として咲き亂れて居る有様で。文學、美術はもとよりの事、建築の發達、彫刻の進歩は此の時より盛んなるはなく、眞に黄金時代とも云ふべきであつた。それといふものも光明皇后の如き方があらせられて、佛敎を興隆し玉ふたから、従つて唐朝の文明も輸入せられ大いに我國文化の發達を助けたのであらう。今奈良の正倉院に其の時代の美術品が保存されてあるが、珍品佳什、驚ろくべきものが多い。

廣 嗣 の 報

(紀元一四〇〇年)
天平一二年)

藤原廣嗣は、式部卿藤原宇合の長子であつて、才智人に勝れ、武藝絶倫にして兵法に通じ、文武に通達せる一箇の豪傑であつた。天平年間從五位下に叙し、十年太宰大貳に任せられたが、當時朝廷には吉備眞備並に僧玄昉あつて、眞備は入唐して碩學の譽高く政務の顧問となり、又玄昉は唐より還りて僧正となり、宮中の内道場に

在て、皇后の信任を受け、其の勢頗る盛んであつた。廣嗣は此の兩者と相合す、常に之を斥けんことを企てた。天平十二年八月廣嗣上表して、政事の得失を論じ天地の災異を陳じて、玄昉、眞備を除かんことを請ふたが、天皇の御許しがない。そこで廣嗣は意を決して其の九月遂に兵を太宰府に起し軍營を遠河郡に造りて、朝廷に叛したのである。此に於て朝廷にては大野東人を大將軍となし、紀飯麿を副將軍とし、一萬七千餘人を率ゐて、之れを征せしめられたのである。かくて東人等は進みて豊前に入り廣嗣の將小長谷常人等を斬り、千七百餘人を虜にしたので廣嗣も亦出で、戦ふたが、戦我れに利なく一向に振はないから、そこで廣嗣は逆も勝てないと覺悟をして、肥前の值駕島より船に乘し耽羅島に遁れんとしたけれども、難風のために再び值駕島に吹戻され、阿部黒麿のために捕へられ、其の十一月松浦郡に誅せられ、餘黨悉く平いたのである。廣嗣もとより逆臣の名は遁れぬが、その茲に至らしめたのは、玄昉、眞備の信任を恃み勢威を逞ましくした餘弊であつて

廣嗣の心中まことに憐れむべきである。佛法崇信の結果は、玄昉、道鏡の如き怪僧を出し、内亂を醸し餘毒を流したのは奈良朝時代の缺點であつて、かへすくも痛嘆に堪へない。

大佛の建立

(紀元一四〇七年)
(天平一九九年)

聖武天皇の御世は、前に述べた通り佛法隆盛の時代であつたが、此の朝の大事業として記憶すべきは、云ふまでもなく、東大寺の建立と、大佛の鑄造である。さて此の名高い大佛は、どうして出来たのか、是非とも之を知つて置くの必要があるのである。聖武天皇は佛法歸依の結果茲に大願を發せられ、天平十五年盧舍那佛造立の詔を發せられた。曰く、率土の濱既に皇恩に霑ふて居るけれども、普天の下法恩治く行き渡らない。それで茲に菩薩の大願を發し、盧舍那佛の御像一體を造らんと思ふ、それで若し人民にして一枝の草一把の土を持ちて之を助けんとする者は、許

してやる。然しそれがために、國司郡司等が人民を煩はす事があつてはならぬと。かくして天平十七年より工事をはじめて、天平十九年に出来上つて其の間八度も鑄直したといふことである、けれども佛像に着せる黄金の塗料が足りない、どうしたらよからうかと一方ならぬ御苦心をせられし折、天平二十一年百濟の敬福なるものが黄金を得て之れを献じた。天皇大いに喜び、之れ佛徳の効す所なりとて、年號を天平感寶と改め、敬福は特に從三位に叙せられた。天平勝寶四年四月大佛開眼の供養會を行はれ、天皇親しく行幸ありて、前古比類なき莊嚴なる儀式を擧げさせられた。さうして此像は本願は聖武天皇、開基は良辨、勸進は行基、導師は菩提仙那であつて世に之れを四聖建立の伽藍と稱へて居る。大佛殿は十九年に工を起し天平勝寶四年に落成したので、天皇は封戸五千戸、水田一萬町を寄進せられ、僧良辨を以て別當に任じ、全國の總國分寺とせられたのである。像の高さ五丈三尺五寸であつて、之れに用ひた銅ばかりでも七十三萬九千五百六十斤を要したとの事である。

まことに古今の大作で、たとへにも大佛の鼻の穴へは傘さしてはいれるといふ位でまさかそんなにもないが、随分大きなものである。但し大佛殿は治承四年と永祿十年に二度も兵火に罹り、其度毎に修補を加へたので、天平創造の儘なるは、胴體の大部に過ぎないが、それでも原形を模して修補したものであるから、今も猶天平の古へを偲ぶに足るのである。佛教崇信の結果は、遂に巨財を糜し國帑を盡して此巨大な佛像となる。聖武天皇が非常の大願を發して、千古の大作を成就せられたる、思ひ切りたる御勇斷には實に敬服せざるを得ないのである。

僧 行 基

(紀元一四〇九年
天平二一年)

奈良の大佛と共に必ず忘れてならないのは、僧行基の功勞である。行基は實に大佛鑄造を衆庶に勸誘したる僧侶にして當時の聖人とまで仰がれたる非凡の名僧であ

つた。行基は和泉の人、天智天皇の七年に生れ十五歳にして出家し、薬師寺に居り、新羅の僧慧基に學び、又義淵に師事した。慶雲元年大和の生駒に退隱して是れより教化を事とし、都鄙を周遊して至る所説法を試み、難所を過ぐれば橋を架し路を修め池を穿ち堤を築き、日ならずして其功成り、道俗其の徳化に服し、行基の過ぐる所争ふて禮拜するに至つた。後に行基は、百性を惑はし法令を犯すとの疑を受けて獄に繋かれしも其の罪なきこと判然して、直に赦され士民の渴仰を受くることますます盛んになつたので、聖武天皇も大に行基を寵して、之れを重んぜられた。天平十七年、特に大僧正に任せられたのである。是れ實に大僧正任官のはじめである。後改めて大菩薩の號を賜はるに至つたのである。かく一僧侶にして破格の優遇を受け、顯達せること前古其比なく、如何に行基の徳高く識深かりしかを知るに足るであらう。かくして名僧は天平二十一年二月、八十二歳の高齡を以て、大和の菅原寺に寂した。

惠美押勝

(紀元一四二四年)
(元平寶字八年)

惠美押勝は、孝謙、淳仁兩朝に威福を壇まゝにしたる人、本姓を藤原仲麿といふ。藤原武智麿の第二子である。深く孝謙天皇に寵せられ、累進して從二位大納言に陞り中衛大將を兼ね、常に君側に侍していふ所聞かれざるはなかつた。天平寶字元年皇太子道祖王疾せらるゝに及びて天皇は押勝の議を用ゐ、衆議を排して大炊王を冊立した。そこで參議橘奈良麿といふもの、深く押勝の專斷を憤りこれを除かんと企だて、事成らずして滅びた。押勝は是より獨り威福を弄し、己れに反對せる公卿を退け、同二年には淳仁(大炊王)を擁立し。權勢いよゝ熾んであつた。此年天皇押勝に勅して官制を改め、押勝は太師(大政大臣)の官に進められた。さうして押勝の名は此時はじめて賜はつたのである。かくして政治は孝謙太上皇と押勝とにて決し、他の諸官は唯是れ命從がふのみであつた。押勝はかく比類なき寵を受

けながら、更に功封三千戸功田一百町を賜ひ、累進して正一位に登り、位祿二つながら其の極に達し、一門皆顯要の地位を得るに至つたので衆怨はますます甚だしく之を憤る者いよく多い。然るにこゝに押勝の大敵があらはれて、彼れの寵を奪ふに至つた。大敵とはたれか、即ち弓削道鏡である。さて押勝は折角寵を獨占し居たるに、僧道鏡宮中に入してより、孝謙天皇は兎角に押勝を疎んじて、之を退けんとの様子が見えたので、押勝は心に之れを憤ほり、密に道鏡を排せんと企て、畿内、近江、丹波、播磨等の兵事の都督となりて、押勝の反謀はいよく露はれたから、上皇は大いに怒りて直ちに少納言山村王をして、中宮院の鈴印を收めしめ、詔して官位姓名を奪ひ且つ功封を沒取した。押勝は其の夜近江に奔つたが、藤原藏下磨は征討使として下向した。日下部子麻呂等は近江に向ひて勢多の橋を焼いたので押勝は大いに狼狽して越前に走り、鹽焼王を立てんとせしも、物部廣成の爲めに破られたから、流石の押勝も進退茲に谷まり、鹽津に渡航せんとして成らず、三尾崎に

て官軍に敗られ、遂に斬らるゝに至つた。傲るものは久しからずとかや、さしも權威を振ふた押勝も、一朝寵を失なひて、あはれ此の最期を見るに至る。權臣の末路悲しむべきである。

弓削道鏡

(和元一四三〇年)

押勝滅びて、孝謙上皇の寵を得たのは即ち弓削道鏡である。道鏡は河内の人に於て少にして僧となり義淵僧正の弟子となり、禪行の聞わが高きので、孝謙天皇に召され内道場に入りて禪師となされた。天皇讓位後も尙其の寵を蒙りて殊に孝謙上皇が御病氣の時などには、晝夜其の側を離れず、御看護申上げたので、上皇の寵はますます厚く、之れが爲めに一時寵を恣にした惠美押勝は、稍疎遠せらるゝに至つた。是に於て押勝怒りて反旗を揚げしも忽ち誅せられ、其の後は全たく道鏡の天下となつたのである。かくして道鏡は上皇の寵を獨占したので、其の官位も進

み、忽ちにして、大臣禪師に陞り、淳仁天皇の疾せられ、上皇重祚し給ひてより、道鏡の寵遇は日に厚く、天平神護元年には、大政大臣禪師に進み、百官をして禮拜せしむるに至つた。上皇は尙ほ之れを足れりとせず、其の翌年には法王の位を授け、服食、乘輿一に天子に擬し無限の權威を振舞ふに至つた。人臣の分として斯く威福を恣にしたのは、蘇我氏以來嘗て見ざる所で、實に潜越の甚だしきものである。然るに道鏡は横暴の極こゝに非分の大望を起し、遂に天位を窺ふに至つた。こゝに大宰の主神に中臣阿曾麻呂といふ者があつた。常に道鏡に媚び阿ねり、これに向つていふには、宇佐八幡の御神託に禪師が天子の御位に即き給ふたら、天下は必ず太平であらうと述べた。道鏡は此言を聞きて大いに喜んだ。然し流石の天皇も之れにはやゝ躊躇し給ふたのである。如何に寵遇並びなき道鏡であつても、如何に宇佐八幡の神託であつても、人臣をして皇位に即かしむれば、我皇室の尊嚴何を以て保ち得べき、天皇は即ち和氣清麿をして宇佐に赴きて更らに神教を受しめ

給ふたのである。清麿は勅を奉じて宇佐に使い還りて天日嗣の皇統を受くべきことを奏したので、道鏡の非望はこゝに頓挫し、天皇また神勅を畏みて、其の儀も沙汰止みになつた。既にして寶龜元年天皇崩じ、光仁天皇即位せらるゝに及んで道鏡を下野薬師寺の別當に貶し、道鏡は貶所に居ること二年にして死し、庶人の禮を以て葬むられ、不臣無道の奸僧はこゝに除かれて、我萬世一系の皇統は、長へに君臨し給ふことを得たのである。

清麿の誠忠

(紀元一四五九年 延暦一八年)

和氣清麿は備前國藤野郡の人、垂仁天皇の皇子鐸石別命より出で、天平神護中從五位下に進み近衛將監に任せられた。神護景雲三年、大宰の神官中臣阿曾麿、宇佐八幡の神勅なりとて、天皇に奏していふ。道鏡をして位に即かしむれば天下は必ず太平であると。天皇も一時はこれに迷ひ給ふたが、既にして天皇親しく清麿を召し仰

せらるゝには、朕は昨夜の夢に宇佐八幡の神勅來りていふには、大神が汝の姉法均尼に託宣し給ふことがあると、それで汝は姉に代りて宇佐に赴き、神教を聴くべしと。是に於て清麿は勅命を畏み、筑紫へ下つた。道鏡は清麿の發せんとするに臨みて、劍を按じ、目を瞑からしていふ、若し宇佐八幡が我が欲する所を得せしめ給へば、宜しく汝を大政大臣となし、國政を委ぬる、然し我が命に違へば汝は重刑に處する篤と神教を承はりて還れと。時に路豊永、心密かに之を憂ひ、清麿に向つていふに、若し道鏡の如き奸僧が、皇位に上つたらどうして之れに仕へられやう、我は寧ろ出で、他に遊ばんのみと、心中頗る安んぜざる所があつた。清麿も此度の事皇室の一大事であるから憤然死を誓ふて、神宮に詣でた。時に神託あり曰く、我國開闢以來君臣の分定まり、無道の者は宜しく之を誅すべし、天日嗣は必ず皇統を受くべしと。清麿神託を承はり、歸り奏するに此事を以てした。道鏡之れを聞き大いに怒り、官を解きて因幡員外介となし、名を別部穰麿と改め、之れを大隅國に流し

た。時に參議藤原百河、清麿の忠烈に感じ其の窮狀を憐み、備後の封三十戸を割きて之れに與へた。光仁天皇踐祚せらるゝに及びて、道鏡を下野國に流し、清麿を召還して本官に復せられた。桓武天皇即位して長岡の新都を營まれしに、徒らに財を費すのみにて、十年を経て成就しない。時に清麿中宮太夫の官であつたが、密かに奏して、山城國葛野の地を相し都を之に遷さんことを請ひ、後遂に其議が行はるゝに至つた。天應十五年從三位に登り次で功田二十町を賜ひ、十八年遂に薨じた年六十七。嗚呼清麿勅を奉じて遠く宇佐に使い、神勅を受けて順逆を匡し、奸僧を除きて、國家を泰山の安きに置く、至誠日月を貫き、忠烈千古に輝く、若し清麿微りせば、皇統茲に絶へ邦家危ふきに至らむ、實に清麿の如きは其忠、其至誠決して他に之を求むべからず。重盛の謙、楠子の純の争でか之に及ばんや。宜なる哉、明治天皇其忠を表し、護王神社として官幣の社格に列し、贈るに正二位を以てせられた。嗚呼忠なる哉。吁壯なる哉。

人 麿 と 赤 人

(奈良朝時代)

我が國の精華ともいふべき、三十一文字の御國歌は、實に奈良朝に至りて發達したものである。其の時代の和歌を集めたるものを萬葉集と稱する。これ我國の歌集としての始めであつて、此の集は、上は仁徳天皇の時より、下は淳仁天皇の頃までの和歌を載せ、其の雄大にしに豪壯なる、此の集に及ぶものなく、我文學史中特筆すべきものである。そうして柿本人麿、山邊赤人などは、當時の歌聖であつて憂に此期を代表して居るから、其れにつき少しく述べやう。

柿本人麿は孝昭天皇の皇子天足彦國押人命より出で、持統文武の兩朝に仕へた歌人である。官位は詳かでないけれども、學者の説によれば六位下の卑官であつたらうとのことである。和歌の才は神に入り古今獨歩と稱せられた。多く知らるゝ彼の百人一首の『足引の長鳥の尾』の歌や其の他至る所で詠んだ和歌は、何れも風格

の高いものばかりである。其の生國も大和といひ、石見といひ、何れとも判然しない、然し晩年は石見に居て、其の地で終つたといふことである。

山邊赤人は、どこの人だか、誰れの後裔であるか、其の詳細は分らない。兎に角天平年中の人であつて、柿本人麿と其名を齊くし、何れ劣らぬ歌人として、今の世までも傳へられ、其富士を詠じて、

田子の浦に打出て見れば眞白にそ富士の高峰に雪はふりける
とは、彼の百人一首にも載せてある、有名之歌である。よつて人麿、赤人を後世和歌の三聖と稱して居る位で、奈良朝文學の代表者と稱するも決して過言ではないのである。その他山上憶良、大伴家持など、みな當時の歌人で、げに當時奈良の都は咲く花の匂ひ榮えて、優美風流の時代であつたのである。

仲 麿 と 眞 備

(紀元一四三〇年——紀元一四三五年)
寶 龜 元 年 —— 寶 龜 六 年

前に述べたやうに、奈良朝時代は文學の發達頗ぶる盛んであつたが、こは單に國文學のみならず、漢文も大いに勃興した。すなはち此期は唐との交通はなほ頻繁にして、數多の學者を輩出し、殊に阿部仲麻呂や吉備眞備は尤とも有名のものであつた。阿部仲麻呂は中務大輔船守の子、幼にして聰明の聞え高く、靈龜二年漸く年十六にして留學生に選ばれ、唐に派遣せられた。留まること數年唐朝に仕へ、名を朝衡と改めた。時の皇帝玄宗大いに其の才を愛し、左補闕といふ官を授け、後ち秘書監に進んだ。天平勝寶年間、藤原清河大使となりて唐に渡りし時、其接待の役に當つた。是よりさき仲麻呂は頻りに故國を慕ふて己ます。清河還るに及び、歸國を請ふて聽され、日本に還らんとて、途中に颶風に遇ひて安南に漂泊し、再び唐に還つたから、肅宗皇帝は仲麻呂に授くるに、左散騎安南都護を以てし、遂に御史中丞北海郡開國公を兼ね、光祿大夫となり、封三千戸を食むに至つた。寶龜元年正月唐に卒した。時に年七十、唐に在ること前後五十年の久しきに及んだから、唐の文人と

の交りも深く、李伯の如き唯一の友であつたとの事である。仲麻呂嘗て故山を追憶し、詠じて曰く、
あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも
と、仲麻呂の逸事はまだくあるけれども此の位で措いて。次は吉備眞備につき述べやう。

吉備眞備は、阿部仲麻呂と共に當時の學者であり、其上政治的手腕を備へた人であつた。靈龜二年二十四歳にして仲麻呂と共に遣唐留學生となり、天平七年歸朝したが。其間唐に在りて博く經史を學び衆藝に通せざるはなかつたとの事である。眞備が唐にありて、耶馬臺の詩を讀まされた、流石の眞備も困つて居るところに、一匹の蜘蛛が天井より舞ひ下りて、詩の讀み方を教へたので、眞備は無難に之れを讀み終つて、大いに唐人を驚倒せしめたといふ逸話がある。歸朝の時には、唐禮だの大衍曆經だの種々の書を我國へ持ち歸りて、之れを殘らず朝廷に献じた。眞備歸

朝して、朝廷に重んぜられ、正六位下大學助より從五位上に累臣して、孝謙天皇の朝には其の學士となり寵遇ますます加はつた。天平勝寶四年には遣唐副使となり、歸朝して太宰大貳に任せられた。彼の筑前の怡土城を築いたのは實に眞備の功である。惠美押勝の叛亂には帷幕に參じて、大いに軍事を計畫し、天平神護元年には正三位に陞り、二年には遂に右大臣を拜するに至つたが、昇進の速やかなる、實に異數といふべしだが、之を以て見るも、眞備が單に一學究に止まらずして、政治的技倆を備へ、且つ軍事的才能を有したる文武の良相であつたかゞ窺はれる。然るに眞備は藤原永手、同白川等と議合はず、光仁天皇の擁立せらるゝに及びて不平に堪へず、遂に上表して職を辭し、寶龜六年八十二にして薨去したのである。其他眞備は律令を改正し、大學釋典の禮を定め、至る所其才能を發揮し大いに朝廷に貢獻したのである。仲麻呂といひ眞備といひ、いづれも唐の文人に劣らぬ程の學者であつて當時、漢文學の隆興したのも決して偶然ではないと思ふ。

渤海國

(紀元一三八八年)

渤海國とは、どこであるか、支那の東晉の代に、滿洲及び東蒙古あたりに國を建てた一種族であつたが、唐の代にはじめて渤海國王に封せられ是より國號を渤海と稱した。さて此の渤海國は、聖武天皇の神龜四年高仁義といふ者をしてはじめて我國に遣はされた。然るに海上で途を失つて、蝦夷地に至り仁義等をはじめ重立つた者は殺され、高齋德等八人のみが漸く命を免れて京に入つたから、聖武天皇は五年正月、大極殿に出御ありて、高齋德等を引見せられ、渤海國の國書貢物を受け給ふた。其國書は至極丁寧で新に交際を結びたいとの文面である。天皇も大に之を嘉せられ、齋德等に位階を授け、歸國の際にはわざ／＼引田蟲麻呂をして、一行を送らしめた程であつた。蟲麻呂歸朝の際には、渤海王よりまた音物を送り、これより時々入貢し、貢獻怠らなかつたのである。然るに此國は附近の強國のために滅ぼさ

れ、是より我國との交通も全く絶え、再び朝貢することはなかつたのである。

平安奠都

(紀元一四五四年)
(延暦一三年)

平安城とは、桓武天皇以來代々の帝王が都あらせられし地にして、とりも直さず今の京都である。青丹よし奈良の都も元明天皇より七代七十五年を経ては、宮殿も漸く疾れ、加ふるに交通不便にして帝王の都に適せず、外夷を討ち皇威を四方に輝かさんには形勝の地を選んで、天下に君臨するの必要がある。こゝに於て英明なる桓武天皇は遷都の議を興し給て、延暦十二年中納言藤原小黒麿、左大辨紀古佐美等を山背に遣はし葛野郡宇多村の地を相せしめられた。是より先き一時長岡の宮を造營し給ひしが、此地は狹隘にして帝京に適せざるよりして、和氣清磨の建議により、山城國葛野郡の地を帝都と定め給ふ事となつたのである。此地や山河襟帯自然に城を爲し、げに萬代不易の帝都としての要地である。さて遷都に決せしより、天皇は勅

使を立て、伊勢大神宮、賀茂社、其他諸國の山陵に其由を奏し次で造宮職を定め、諸國の役夫を發し、宮殿の經營に着手し、此より車駕屢々親臨、造宮の事を督し給ひ、明くる十三年十月二十二日には、早くも新宮へ遷幸あり、庶民謳歌して平安京といふ。さればこそ皇都は是よりいよく平安にして、明治天皇東京へ遷幸あらせられしまで、此地は永く帝都として、あやに畏き我が天皇の鎮まり給ふところとなつたのである。

坂上將軍

(紀元一四七一年)
(大同二年)

坂上田村麿は刈田磨呂の子、延暦中近衛少將に進み、武勇の名頗ぶる高き將軍であつた。是より先き、蝦夷亂れて戰爭絶えず兵を遣はして之を討せしむるもすこしも其功がないので、天皇は即ち田村麿に仰せられ蝦夷に向はしめ、大將軍大伴弟麻呂に従ふて、征討せしめられたが、果して大捷を奏し、其功により従四位下に叙せら

れ、延暦十五年には陸奥出羽按察使兼鎮守府將軍となり、尋て征夷大將軍に進んだ。二十年陸奥蝦夷復た反し、田村磨呂節刀を賜はりて行いて之を征し、大に蝦夷の巢窟を破りて凱旋したので功を以て從三位に陞り、二十一年には陸奥の膽澤城を築きて蝦夷の鎮所となし、二十二年にはまた志波城を築き其急に備へたのである。二十三年には再び征夷大將軍となり、累進して正三位に叙せられ武勳赫々とし、威望朝野に重きをなすに至つた。弘仁元年嵯峨天皇、平城天皇と不和を生じ、その結果は皇子の變となつたが、當時田村磨呂は衛府に居りて威名の高かつた時であるから、天皇は田村磨呂が上皇に興せんことを恐れ、中納言より遽に大納言に昇進せしめ給ふた程であつた。かくして田村磨呂は光仁二年功成り名遂げて年五十四を以て、粟田の別業に薨じたのである。天皇大に哀悼し給ひ、詔して從二位を贈り、山城國宇治郡栗栖村に、水陸田三町を賜ひ、屍を棺中に立て、平安城に向はせ、甲冑刀劍弓矢の類も一所に埋めた。爾來大將軍の出征する毎に必ず其墓に詣でて戰勝を祈つたといふこと

である。そうして田村磨呂の佩びて居た劍は皇室の御藏に納め、名づけて坂上の寶劍と稱するに至つた。田村磨呂は身長五尺八寸、胸の厚さ一尺二寸、身の重さ二百一斤、眼は蒼隼の様で、髯は金の針を植ゑたる如く、一度怒れば鬼神も懼伏し、笑へば、小兒も懐いたといふ、恩威並び行はれた、天晴の名將であつたのである。今尙は將軍塚として其名は京都に残り、國家事あるときは、必ず震動すると傳へられて居る。

淡 海 三 船

(紀元一四四五年)
延 暦 四 年

淡海三船は葛野王の孫、池邊王の子にて天平勝寶三年姓を賜はりて淡海真人といひ臣簿に下つた。惠美押勝の反には、三船は勢多に向ひて功を建て正五位に叙せられ、近江介より中務大輔に遷り侍從を兼ねるに至つた。天平神護二年には功田二十町を賜ひ、寶龜中には累進して大學頭文章博士となつた。三船性聰慧にして博く羣書に涉り且つ文才に富んで居たが、殊に三船の功績として録すべきは、曆代天皇の

諡號を選んだことである。抑も古は先代の天皇を稱し奉る場合には何宮に即位せられたる御世の天皇と申して居つたが、皇居も一定し、帝都も平城に奠められてより、宮號を稱する譯には行かなくなつたので、それよりは専ら諡號を稱へて居た。然しそれでも國風の御名前で、どうも稱へ難いので、桓武天皇が平安に都あらせられてから神武天皇以下光仁天皇までの諡號を、漢風で定むることとなり、即ち淡海三船に勅して之を選せしめられたのである。なほ此諡の事につきては後世種々の議論もあるけれども、そは諸君が他日の研究に譲りてこゝには三船が、桓武の勅を奉じて、諡號を選んだといふことを説いたまでである。かくて三船は延暦四年、年六十四にして卒したのである。

藥子の變

(紀元一四七〇年
弘仁元年)

桓武、平城二帝を経て、嵯峨天皇即位し給ふに及び、所謂藥子の變起りて、一時

都下を騒がしたのである。抑も藥子は藤原種繼の女、仲成の妹にして、はじめ中納言藤原繩主に嫁して居たが其の姉の縁にて、東宮(平城天皇)の女宮となり太子に奉侍した。然るに藥子は其容姿端麗なるより、太子の寵を受け、桓武天皇崩じ太子即位せらるゝに及びて、藥子は尙侍となり、寵愛日に濫く、藥子も巧みに天皇に媚びて其の御心を動かし、はては政事向きにも關係するに至つたのである。藥子の兄仲成も、妹の縁で權勢を待み兄妹威權を壇にし王公を侮蔑し頻りに我儘を行なふた。即にして藥子は從三位に陞り、天皇の御寵愛は依然として衰へない。然るに平城天皇は太子に御讓位ありて、嵯峨天皇即位し給ふに至り、流石の藥子も最早我儘を振ふことが出来なくなつた。そこで藥子は蜜かに上皇に重祚せしめて、自分が皇后にならうと企て、弘仁元年九月勅命と矯り、都を平城に遷さんとしたので、市中は大騒ぎで、人心恟々たるの有様であつた。嵯峨天皇は大いに恐れ且つ怒りて、直ちに仲成を捕へ詔を下して仲成藥子の罪を擧げ、其官位を奪はれたのである。是に

於て平城上皇は大いに怒り、畿内及び紀伊の兵を發し藥子と輩を同くし、東國に赴かんとし給ふたが、天皇は坂上田村麿の謀を用ひ、參議文屋綿麿をして、美濃路に至り上皇を遮ぎらしめた。上皇は大和國添上郡越田村に至り大軍既に道を扼して居ると聞き、最早如何ともする能はざるを見て、宮に歸りて薙髮し給ひ、藥子は毒を仰ぎて死し、仲成は誅に伏し、亂はこゝに平いだ。天皇は性總敏、博く經書に通じ文章に巧み萬能の譽れ高い、英明の天子でありながら、ただ御素行修まらず、尙侍藥子の愛に溺れて、兩宮の不和となり、遂に内亂を醸し給ふに至つたは、かへすくも惜むべきである。

嵯峨 天皇

附 檀林皇后 (紀元一四六九年) (大同四年)

桓武天皇の後は、平城、嵯峨、淳和御兄弟にて、三代つゞいて位を嗣がせ給ふたが何れも好學の君にましましてしも、とりわけ嵯峨天皇は、好んで書を讀み給ひ博く經

史に涉り、詩文を善くし多智多能にあらせられたが、殊に書道に巧みにて、弘仁九年には平安城殿門の額に御筆を染めさせられ、筆勢雄勁、橘逸勢、僧空海と共に本朝の三蹟と傳へて居る程である。天皇はかく好文にましましてしかば、神泉苑、冷泉院等にて屢々觀櫻の御宴を催されて、其度毎に詩賦の御興あり、されば萬葉集も此御世に成就し、ために平安文學もいよゝゝ發展するに至つた。然し天皇は萬事支那風を喜び給ひ、はては禮式衣服等に至るまで、唐制に模倣せらるゝに至つた。されば漢學大いに勃興し詩集の勅選もあつた位である。かくして平安朝初期の文學は、帝によりて獎勵せられ鼓舞せらるゝに至つたのである。されば平安文學を説くには必ず天皇の御名を逸してはならぬのである。

檀林皇后名は橘嘉智子、橘清友の女、嵯峨天皇いまだ親王であらせられたときに、嘉祥子を納れて御寵愛深く、天皇即位の後、皇后となり玉ふたのである。後ち檀林寺を創建せられたから、人呼んで檀林皇后と稱する。資性温良にして寛厚、手

は長く垂れて膝に至り、髪は長く地に曳きて風姿殊に勝れ、まことに絶世の趣きがあつたので、嵯峨天皇の御寵愛も深く、皇后また貞淑を以て天皇に仕へ、春風常に宮園に瀟ち、琴瑟和合して和氣霽々の有様であつたといふ事である。皇后は爾來専ら化導を務め給ひ、また篤く佛法を信じて檀林寺を建て、比丘尼の持律者を置かれ學館院を設けて、橘氏の子弟に經書を學ばしむる等、大いに力を盡し給ふた。後ち仁明天皇外數子を擧げ給ひ嵯峨天皇讓位の後、淳和天皇即位せらるゝに及び、皇太后となり、仁明天皇即位の後、更に尊ばれて太皇太后となり給ふた。仁明天皇御不豫の際には、太后はいたく御憂慮のあまり、遂に落飾して尼となり給ひしも其効なく、嘉祥三年三月天皇遂に崩御あり、太后慟哭、爾來鬱々として樂み給はず其五月太后は天皇の後を率ふて、遂に崩御し給ふに至つたのである。嵯峨天皇、曆代帝王に勝りて博覽多識にましまし之れに配するに、温淑閑雅の皇后を以てす。其宮室輯睦して、朝野の瞻仰する所となつたのは、また偶然ではないのである。

高 岳 親 王

(紀元一四七〇年) 弘 仁 元 年

高岳親王は平城天皇第三の皇子にして大同四年嵯峨天皇即位せらるゝに及びて皇太子となり給ふたのである。然るに平城嵯峨御不和の御事ありて、藥子仲成の亂となり平城上皇は薙髮せられ、親王また連座して太子を廢せらるゝに至つた。そののみならず親王の子女は皆王號を停められ、臣籍に列して在原の姓を賜ふたのである。いかに平城上皇の御心得違ひとはいひながら、罪なき親王まで斯かる境遇になり給ふのは、まことに御痛ましき譯であるから、弘仁十三年に至り親王は特に四品に叙せられた、しかし親王は憂憤に堪へ給はず。いたく現世を果敢なみ給ふて、幾干もなく薙髮して僧となり給ふて、名をも眞如と改め、東寺に入りて専ら眞言宗を研究し後に阿闍梨となり給ふたのである。承和二年詔して、平城の水陸の田地二百餘町を賜ひしが、貞觀三年唐に赴きて、法を求め給ひ、留まる事十餘年を経て歸國の沙

汰がない。さうして當時唐は佛法の衰微して居た時だから、遠く天竺へ漫遊せられた。そこで親王の子孫は、親王の安否がわからぬので、いたく憂慮して居たが、年を経るも歸國の様子が見えないので、これはきつと没したものだらうといふ事になり、嘗て親王に賜はつた封地を還す事となつた。然るに其後入唐の學問僧の上奏に親王は遠く西域に入り、羅越國に至りて虎に害せられ、薨せられたとあつたから、時の皇帝陽成天皇は大いに痛惜し優詔を賜ふて、之を弔せられたといふことである。當時御年は八十餘になられたのであるが其羅越國とは今の印度地であらう。兎に角本邦人の印度に入つたのは、親王を以てはじめとする。かへすくも平城嵯峨の御仲達の事さへ無くばやがては、九五の尊に上り給ふ御身でありながら、餘累親王に及び、東宮より貶せられて諸王の列に降り、憂憤世を避けて、東寺に入り遂に老軀を提げて遠く西域に遊び、虎害に遇ふて屍を異郷に曝するに至つたるは、まことに御悼ましい事である、親王の御胸中を察し奉るだに涙の種である。

大正十三年六月十二日發行
大正十三年六月三十日發行

定 價 金 五 拾 錢



(1) 史 民 國 本 日
へ 朝 安 平 り よ 國 建

著 者 東京市牛込區新小川町二丁目四番地
發 行 者 小 林 善 八

印 刷 者 東京市牛込區東五軒町三十番地
下 平 敬 一

發 行 所 東京市牛込區新小川町二丁目四番地 (振替東京二二二〇二番) 文 藝 社
發 賣 所 東京市神田區美土代町三丁目一番地 (振替東京三三〇七番) 文 陽 堂

國民叢書

定價各十四錢 送料各四錢 小 林 鷺 里 著 四 六 判 百 餘 頁

日常科學の話

科學知識の普及！
文化生活の基礎！
由來我が國民は科學的知識に乏しい。本書は日常吾々の遭遇する科學現象を解釋したるもの。

新聞の基礎知識

新聞を讀まぬ者なし！
本書を備へざるはなし！
新聞を讀む効果を一層大きくしようとして、各部門により基礎となる知識を述べたもの。

國民としての常識

國民常識の精隨！
日常生活の羅針盤！
東洋の大國民として體面を維持するに必要な知識を選んだもの。何人も之だけは心得て居らねばならぬ。

東京市牛込區 文藝社 小川町二ノ四 電話 二〇一一番

國民叢書

定價各十四錢 送料各四錢 小 林 鷺 里 著 四 六 判 百 餘 頁

新しき修養

喘み碎かれたる修養書！
現代人心の榮養！
かた苦しい修養書の弊を補ふために、格言により例によりつとめて層のこらぬやうに修養の目的を達しようとしたもの。

宗教早わかり

宗教は思想統一！
安心立命の境地！
世界多くの宗教中から特に十大宗教を選び、教祖教義、現今の状況を述べたもの。

立志より成功への近道

成功への指導書！
立身への秘訣！
小學校を卒業して直ちに入る學校を調査したるもの早く成功しやうとする人々の唯一の指針である

東京市牛込區 文藝社 小川町二ノ四 電話 二〇一一番

書叢民國

錢十四各價定 錢四各料送 著里鷺林小 頁餘百判六四

<h2>新しき年中行事</h2>	<h2>藝術の話</h2>	<h2>文化生活の基調</h2>
<p>國民性の發露！ 國民の風俗史！ 建國の昔から行はれてゐる年中行事を取捨選擇して時代の流れに適合するやうに述べたものである</p>	<p>文化民族の心の糧！ 現代人の必備書！ 藝術といふ言葉を使ふ人でも藝術の何たるかを知らない人がある。 本書は藝術全般に亘つて平易に述べたものである</p>	<p>新人の新生活！ 文化生活の建設！ 文化生活といふ語を口にすること多けれどその根本的精神を知らざるものあり本書はその基調を説いて文化生活を明かにせるもの</p>
<p>東京市牛込區 文藝社 小川町二ノ四 電話 二〇一一</p>		

書叢民國

錢十四各價定 錢四各料送 著里鷺林小 頁餘百判六四

<h2>哲學早わかり</h2>	<h2>偉人の修養</h2>	<h2>經濟學の知識</h2>
<p>現代人の要求！ 人生觀の樹立！ 如何なる民族も哲學を持たざるはなし、今日哲學要求の聲や高し。 本書は一讀哲學の何たるやを知らしめんとす。</p>	<p>偉人の日常生活を見よ！ 而して吾人の生活を樹てよ！ 古來の英雄偉人といふ人々の背後にかくれたる修養談を集めたるもの。現代人の以て手本とするに足る。</p>	<p>經濟生活の指針！ 先進國民の必携書！ 専門的經濟書の弊を補ふ目的を以て、通俗的に經濟學の根本を述べたもの一讀經濟學の何たるかを知り得る。</p>
<p>東京市牛込區 文藝社 小川町二ノ四 電話 二〇一一</p>		

文藝新社刊圖書

<p>小林篤里著 イブとその子達 定價 貳圓 送料 八錢</p>	<p>小林篤里著 釋迦の生涯と思想 定價 貳圓 送料 八錢</p>	<p>小林篤里著 大楠公 定價 壹圓參拾錢 送料 八錢</p>
<p>函入 布表裝 天金美本</p>	<p>函入 布表裝 天金美本</p>	<p>函入 美表裝</p>
<p>女に對する見解や、要求は時代／＼に依つて違つて居る女性の性質、女の魅力、女性の心理、それ等を歴史的にイブ以後の女性につき解剖を試みたのが本書である。</p>	<p>釋迦の生涯は殆んど手にとる如く知ることが出来る、現今の如く思想問題のやかましく稱へらるゝとき、本書に依つて此偉大なる力を得られよ。</p>	<p>忠孝の本旨が年々遠ざかる現代思想の悪化は讀者の慨歎するところ、本書は大楠公一代の偉業を史實的、通俗的に筆を進め、一般家庭に向つて此日本魂の具體化せしむるもの、忠臣を偲はしめんとするもの</p>

國民叢書

定價各書十四錢 送料各書四錢 小林立篤里著 四六頁

<p>論理學早わかり</p>	<p>野球の話</p>	<p>思想善導</p>
<p>正しき言論の必要！ 正しい言論をしようとするには、その知識がなくてはならない即ち論理がそれである。それをつとめて平易に述べたもの。</p>	<p>國民體育の向上！ 今や如何なる山間の地に於ても野球の行はれてゐない所はない本書は初めて野球をやる人のため、野球を見る人のため、書いたもの。</p>	<p>思想善導の急務！ 外來思想の消化に困つてゐる我が國民はともすれば危險に陥るかと思はれる今日、本書は思想善導の基礎を説いて示したものである。</p>
<p>東京市牛込區 文藝社 二丁目一〇番 東京市牛込區 四丁目二番</p>		

— 讀者の藝文の主とせよ —

月刊 藝文 雜誌

毎月一日發行 定價貳拾五錢 送料一錢

◇ 藝文を手につかずして藝文を語る不可

圖 藝文趣味の鼓吹！

隠れたる青年文士を世に紹介せんとす。
諸君の作品に對しては絶対の尊重を與ふ。
誌上を開放し讀者にはあらゆる自由を與ふ。
定價の至廉なるは利益主義に非ざる事を證す。
趣旨に於て他の雜誌と異るところを誇りとす。
讀者諸君自身の雜誌！

散文（抒情、叙事、叙景）感想。短文。
詩。短歌。俳句。川柳。情歌。

每 號 懸 賞 募 集（毎月十五日締切）

■ 純粹藝文の宣揚！

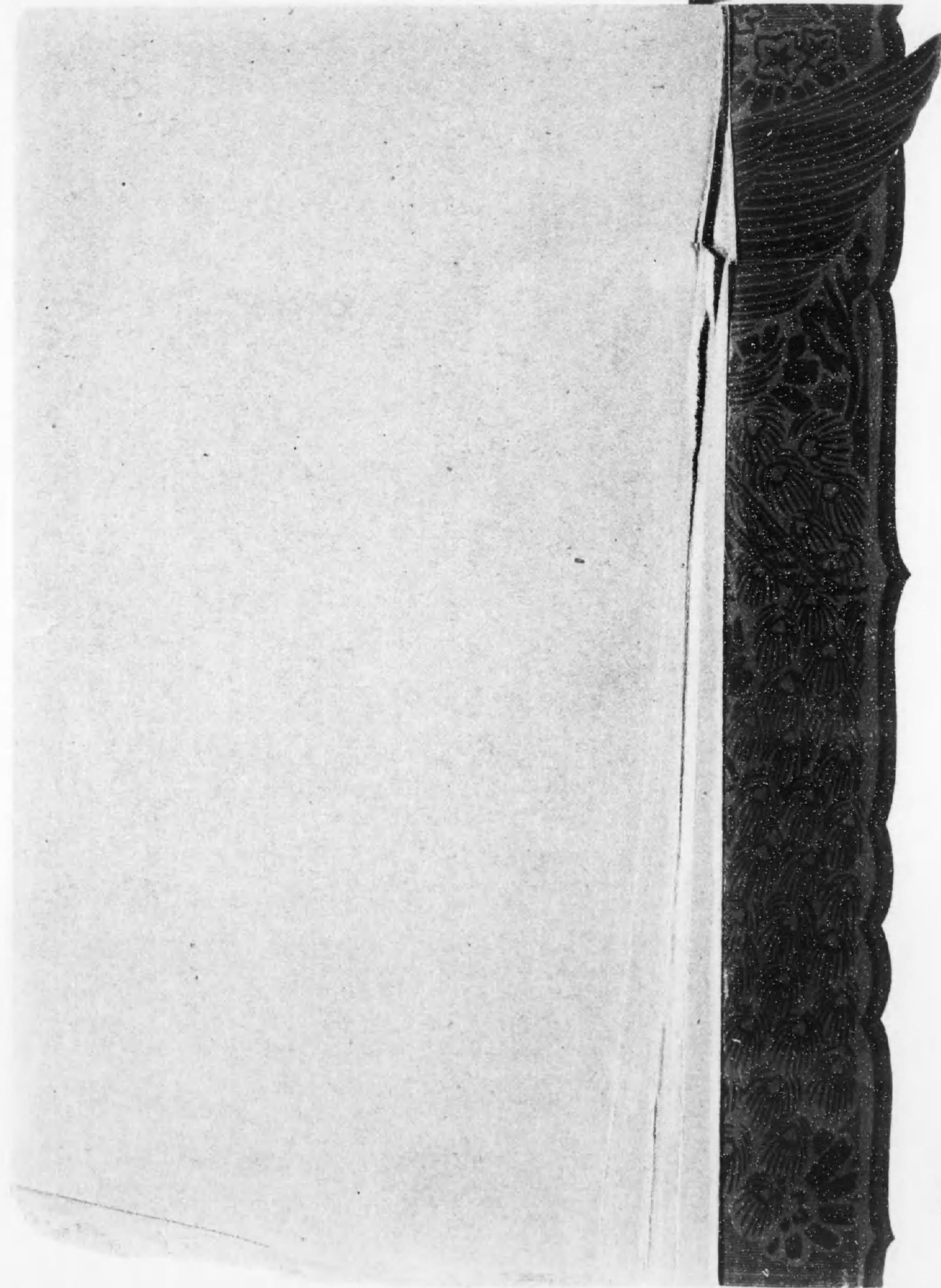
◇ 學生諸君及投稿家唯一の機關雜誌！

東京市牛込區 文藝社 東京市牛込區 小川町二ノ四

露光量違いの為重複撮影

文藝社

露光量違いの為重複撮影



文藝社

527
34

終